

浄土

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可（毎月一回一日発行）
昭和二十四年四月二十八日 運輸省（特別取扱承認雜誌第三五二号）
昭和三十四年十二月二十五日印刷 昭和三十四年十二月一日発行

第二十五卷

第十二号

十二月号



◇◇信仰の歩みを進めるために◇◇

新刊

浄土トラクト

大正大学教授 佐藤賢順著

信仰へのみちびき

B六版・十六頁
定価十五円十八円

目次

1. 大慈悲の仏教
2. 知性を超えて
3. 美的情感を超えて
4. 本願の不思議にて
5. すべてを包む愛
6. 人生は信ずる心から
7. お導びきのままに

大正大学教授 竹中信常著

仏教入門

B六版・三十一頁
定価二十円十八円

目次

1. 馬に水を飲ませるもの
2. 流れゆくもの
3. なやまとまよいのもと
4. すでに救われている
5. 信ずるところ
6. 仏を思う
7. 新しい生活
8. 美わしき世界の建設

東京都品川区上大崎一の七八二

法然上人鑽仰会

振替 東京八二一八七番

浄土 十二月号 目次

表紙・扉絵

さし絵・カット

結城天童

加藤金一

穢土の浄土へ……………古田紹欽…(2)

浄土についての考え方

物も云いよう……………(31)

高僧伝 岩井智海……………大橋俊雄(16)

經典解説 般若心経……………斎藤精也(18)

東西鐘談義

鐘の音は人生の故郷……………村上博了(8)

鐘の音は無常の調べ……………高橋良和(11)

聞きかじりの記……………秋松子(22)

無量寿経と法然上人……………石原宥政(13)

法然上人の感化……………H・M(7)

浄土歌壇……………岩野喜久代(39)

逝く年の宗教界……………(32)

本年度目次一覧表……………(35)

扉の御法語……………(20) 会員だより……………(40)

童心仏心……………(15) 会員紹介……………(40)

釈尊の生涯(五)……………佐藤密雄……………(24)

浄土

十二月號

あの阿波介も、仏たすけ給へ
とおもひて南無阿弥陀仏と申
す。源空も仏たすけ給へとおも
ひて南無阿弥陀仏とこそ申せ、
更に差別なきなり。

法然上人御法語



穢土の淨土へ

——淨土についての考え方——

古 田 紹 欽

淨土が西方十万億土に有るか、或は唯心の淨土にあるかは、それぞれの見方の相違と言う外はないが、この二つの見方は全く相反して相容れない説とは考えたくない。このことについては後に論及するとして、大体、淨土は穢土に對してたてられる時は、この兩土の距離は十万億土と言っている程にかけ離れて存在すると言うのが当然であり、どうしても遙か彼方の存在と言わなくてはならなからう。と言うのは淨土は淨土を建立し得るだけの能力的背景があつて初めて実現し得るのであり、夢想したり、妄想したりするだけでは実現し得ないのであり、仏だけがこの淨土を実現し得る能力を持っているが、我々衆生はこの能力を持たないのであり、衆生に取っては淨土の実現は自己の能力を

越えたものであり、淨土は衆生からすれば十万億土の彼方に存在すると言わざるを得ない。つまり、とても衆生にとつては手の届かない世界と言わざるを得ない。

それでは衆生は淨土には縁なき衆生であるかと言えば、衆生は、自からは淨土を建立する能力はないが、仏の衆生を救おうと言う仏の願力によって、仏の建立された淨土に仏の力をかりて往生することが出来るのである。淨土は衆生には確かに隔絶された彼方の所在ではあるもの。決して、行き着き得ない世界としていてのではない。「たとひわれ仏をえたらんに、十方の衆生、心をいたし信樂しんぎょうしてわがくに生ぜんとおもふて乃至十念せん、もし生ぜずば正覺をとらじ」(第十八願)とあるように、弥陀は衆生

の一人でもが、弥陀の浄土へ往生しようと望みながら、その望みを叶えないならば、弥陀自身としては、浄土にあることは自由自在であっても、その浄土に自己のみがとどまることは欲しないとしているのであり、衆生は、言わばこうした弥陀の願力の保証によって、浄土往生が可能であるとされているのである。

こう言うことになる、弥陀の浄土がたとえ十萬億土の彼方にあるとしても、行き着くことの不可能な彼方ではなくて、この十萬億土の距離も、弥陀の願力によると即得往生であり、まことに一瞬にして踏み越えることが出来るのであり、しかも、確實で極めて簡易にそれが出来るのである、十萬億土は遠い遙かな彼方とばかりは言えないのである。つまり、浄土は遠くて近い存在であると言わなくてはならないのである。理想は遠いが、実現出来て見れば遠い夢ではないようなものと言わなくてはならないのである。

弥陀の浄土が遠い彼方の存在であるとするのは、衆生の側から言うことであり、弥陀の願力の方からすると、話は別であるわけであり、言い換えれば、衆生有能力にあつては、浄土への路は難渋であり、衆生自からの力、即ち自力では浄土往生はむつかしいのであり、弥陀の願力、即ち他力ではこれがやさしいのであり、十萬億土の距離の尺度は

全く自力であるか、他力であるかによって、異なるのであり遠いようで近く、近いようで遠いと言わなくてはならないのである。

それならば、何を好んで自己の能力を超えてまで、浄土への彼方を目ざして衆生は行こうと志すのであるかと言え、衆生は自己の能力を過信するためであるとし、この点については、自己の能力の限界を自覚して、弥陀の願力によって、浄土往生が必らず遂げられることを信ずることが不要の力を勞しなくてすむ所以であることを、浄土教は力説して教えるのであり、自力の難行を捨てて、他力の易行に従った方が、浄土へ往生する最短の近路であるとするのである。

浄土論に難易の問題が取上げられ、論註に弥陀の浄土往生と難易との関係が一層明かにされ、爾来、シナの浄土教を経て日本の浄土教に至るこの教えの系譜は、自力による浄土往生への至難さを、如何に他力による容易さに置き換えて説くかに、努力が払われたものと言つても過言ではないと思うが、称名念仏の一行をもつて、往生の本願であるとするまでに、浄土往生は易行化して説かれることになつて、浄土への距離は遠いながらも縮められ、しかも、易しい路とされたのである。

二河白道の譬喩に、水火の中間に僅か四、五寸ながら白道が通じていることを言っているが、この白道の通路こそは、西方淨土が穢土と無縁の關係にないことを物語ろうとしているのであり、淨土へはどのように遠いにしても、通ずる路は淨土の方から切り拓かれていることを示しているのである。この白道が切り拓かれたことは、淨土と穢土との無限の距離を既になくしたことであり、二河白道の譬喩に、この白道がどのように危険にさらされていることを説いているにしても、必らず淨土へ行かれることの可能性を示しているものと言わねばならないのである。白道の中間にあって、水火の波浪におびやかされ、群賊惡獸におそわれ、唯一人、進退きわまった時に「我れ今廻るともまた死なん、住まるともまた死なん、去るともまた死なん、一種として死を免れず、我寧ろ此の道を尋ねて、前に向って去らん、既にこの道あり」とあるように既に淨土に行く路は拓かれているのであり、最早、淨土への距離は距離に關係することではなくて、往生するものの決意如何だけに拘ることになっているのである。

さてこの場合、重要なことは、この拓かれた淨土への通路であり、この路はただ一方むきに通じていることにとどまらないと言うことであり、通路に往還があると見なくて

はならない点である。往相廻向、還相廻向と言うことが言われるが、往って還ることから往還になるが、穢土から淨土へ往くように、淨土から穢土往くとすれば、何れも往相であるとしてもいいのであり、ただ、路は穢土からも、淨土からも相互に通じていると言うことが、この路の大切な通じ方であることを知らなくてはならない。「廻向と言ふは彼の国に生じをはりて、還って大悲を起し、生地に入して衆生を教化するをまた廻向と名くるなり」と言う表現を撰択集はしているが、廻向には還相がなくてはならないのであり還相と言うことは、もう一度穢土に戻ってと言うか、穢土に往ってと言うか、衆生教化の働きをすることであり、淨土へ往くことは、淨土へ往っただけにとどまってはならないといっているのである。このことは淨土から出て行くことであり、別の言葉をもってしたら、穢土へ往生することと考えざるを得ないのであり、往生は、白道を媒介にして両方からあると見なくてはならないのである。淨土から穢土への往生も無論、即得穢土で、十萬億土の距離のあろう筈はないのであり、淨土と穢土とは土地続きにつながっていると言った方が、至当であるかも知れないのである。

穢土から淨土へ往く場合は、穢土を捨てて淨土へ行くことになるが、淨土から穢土へ往く場合は捨てるものではなく

淨土から見て穢土と考えられる穢土に淨土は移って行くのであり、穢土は淨土でさえあるのであり、一旦、淨土往生した人は生死に廻入しても生死のなかに淨土を見るのであり、生死の流れに流されと言うことは、有り得ないのである。「彼の国に生じをはりて、還って大悲を起し……」

とあることから見ても知られるように、生地の流れに溺れているのでは、大悲心は起らないのであり、未だ彼の国に生じおわらない人であつては、彼の国と此の国、淨土と穢土とは別々であるが、生じおわった人であつては、淨土即穢土であり、穢土のなかにいて淨土が存するのである。生じおわった人であつては、淨土は定着していないのでありその人の動き出でるところ、何処にも淨土は活動して行くのである。淨土はその人を離れないのであり、人と共に淨土はあるのである。穢土から淨土へ行く人は、淨土を目ざして行くのであるが、淨土から穢土へ行く人は、淨土を背負って行くのである。

更に別な言葉で言えば、一旦淨土に往生した人は、自からの占める土としては穢土はないのであり、淨土を背負つて穢土に転入するのである。西方淨土の西方は、一方向の淨土ではなくて、西方十万億土の淨土が、淨土から穢土に転入した人であつては、その人の尽十方世界に及ぶ活動と

共に、尽十方世界に發現するのであり、何処にも西方淨土が存するのである。まだ淨土往生しない人にとつては、西方淨土は定着して見えるが、淨土が定着しているのでは「大悲を起し、生死に廻入」することは出来ないものであり淨土は活動するものでなくてはならないのである。

さきに西方十万億土の淨土も唯心の淨土も見方の相違であると言つたが、淨土門の淨土とか、聖道門の淨土とかと初めからワクを考えて淨土を考えるから、淨土をそれぞれに限定して見ることになるのであり、淨土は尽十方世界に發現するのであり、心のうちにもあれば外にもあり得るのである。唯心の淨土だけと言つた淨土はないのである。西方とは淨土のあるところ、唯心とは淨土のあるところであつて。「西方に」「唯心に」と言つた特定のところだけに淨土があるとしてはならないのである。西方淨土が考えられ、淨土往生への易行や、他力が考えられるのは、未だ淨土に往生しない人の場合であり、一旦往生した人にあつては、難易、自他の相對の世界はないのである。尤も、正信偈に「往還の廻向は他力による」としていて、他力の力でないものはないとしているのであるが、この場合、還相廻向の他力は自他相對の上で言っている他力の意味ではないのであり、ただ絶対唯一の力であることを指しているの

ある。

浄土往生には必らず、至誠心、深心、廻向発願心の三心を具さなくてはならぬとするのが、浄土教の基本思想であるが、往生しおわった後に、この三心がどのような働きに転ずるかと言えば、還相廻向の大悲心となるのではないかと思われるのであり、浄土はどうしても大悲心のきざすところ穢土に接近して行かなくてはならないのであり、穢土と浄土との隔絶は許され得ようがないのである。

二河の白道は、此の方から彼の方への路であると共に、彼の方から此の方への路でもあるのであり、彼の方から此の方への路になると水火の波浪も群賊も、最早見られないのであり、浄土から穢土へは一筋につながっているものであり、浄土から穢土へ往く場合、浄土は穢土の方にこそあるものと仰がれるのではないかと思われるのである。論註に還相を説いて「生死の稠林に廻入し、一切衆生を教化して共に仏道に向ふ」として「共に仏道に向ふ」と言っているが、穢土にあつてのこの仏道の方角は何処にあるかと言えば、浄土が穢土に顕現した尽十方世界のあらゆる方向にあると考えられるのであり、衆生は穢土そのままに共に従つて仏道を行じ得るのであり、浄土は穢土のなかにあるとさえ言つてもいいのである。

（筆者・北海道大学教授）

山 友

『何おか山のごとしというも、たとえば鳥獸金山のうえに集まれば、毛羽光をこうむるがごとく、おのれ貴とければ、よく人を榮えしめ、富貴おなじく歎ぶ。これ山友なり』

と。シユミ山に近づく鳥は金色なり、と昔の高徳はいっている。一人がもし成功して金山のようになったら、おおくの知己や友人たちを、その恩光に浴せしめることができる。そして自他ともに喜びあうのを山友ということです。

地位でも、富でも、名声でも、脳でも、頭でも、芸でも、人格や徳行。とにかく人並以上にすぐれた力をもつて、よく知己友人をうるおす。こういう人物を山友という。また、たとえ一部に欠点があつても、とくにすぐれた長所美点をもつていて、何ものかを我れに教える点があれば、これも山友として交るのも悪くはないとおもう。まことによき友にめぐり合うことができるのは、幸運です。よき友を得るためには、みづからもまたよき人間たらねばなりません。交友にさいしては、まづ相手の善し悪しをえらんだ上でまじわり初めねばなりません。

滝宮念仏踊

一

四国高松市に無形文化財「念仏踊」がある。郷土色ゆたかなもので約七百五十年来伝承の行事と云われている。

この地方の伝説によるなれば、それは建永二年夏のことであった。この年の讃岐地方は稀な旱天つづきで、路傍の道草も枯れはてると云う最悪の状態であった。

苦しい時の神だのみ、国中の寺社に雨乞祈禱を行ったけれども、連日の旱天少しの験もなかった。

菅公旧趾の滝宮に集った人々は、只天を仰いで嘆息するばかりで、生色が全くなかったのである。

これより先、塩飽笠島から、法然上人が小松庄生福寺に移られた。

大師は先づ所の産土神である滝宮に参詣され、たとえしばしの間とて、その所に止住するからには、産土神に挨拶される。即ち詣でられることは、人のつねなりとして、夕闇迫る頃おい、二三人のお弟子と共に参詣されたのであった。

二

その時、丁度途方にくれて、お互に顔を見合せては、ため息ばかりついていた里人達は、都に名高い法然上人の参詣と聞いて、期せずして「雨乞いをたのむ」こととなつたのである。

里人達に「あい願」されて、大師は、大變にお困りになった。

經に祈雨經あり、又古来大徳達の、雨乞い靈験の話をかきかめでもなかったが、未だ雨乞いの行事は行われたことはなかったのである。

併し旱天に悩む人々を見て、又その困乏の様子をきいては、黙して「我関せず焉」とは、どうしても出来なかつたのであった。そこでお伴の弟子とその場の人々と協力して、一七日間の百万遍念仏を修行し、至誠を捧げて、祈雨されたのであった。

満願の日に當って、大雨沛然、忽ちに田畑は雨に濡え、歡喜の悦びに充ち充ちた。里人の喜は、手の舞い足の踏むところを知らずと云う状態となり、大師を中心として自然に踊りの輪は出来たのである。

三

大師の御伝の中には、このことはどこにも見出せない。併し念仏踊は、今日も相伝えて行われている。この時の大師の立像も又、仏生山法然寺本堂の脇壇に安置されている。木像合掌体、一寸こわいお姿に拝される。併し何らの根拠のないところに、かかる話の生れる筈もない、殊に毎夏滝宮法然上人像を、仏生山から遷坐しては、盛大なる念仏踊の年中行事が行われていることは、その事実があつたことを伝えるものに

外ならない。御伝の中に、

一、百万遍の事。仏の願にては候はねども、小阿弥陀經に、若一日若二日乃至七日、念仏申ん、極樂に生ずると、とかれて候へば、七日念仏申べきにて候。その七日のほとのかずは、百万遍にあたり候よし、人師釈して候へば、百万遍は七日申べきにて候へども、たへ候はざらん人は、八日九日などにてても申され候へかし。さればとて百万遍申さざらん人の、むまるまじきにては候はず。一念十念にても、むまれ候なり。一念十念にても、むまれ候ほどの念仏と思候うれしさに百万遍の功德を、かさぬるにて候也としてゐる。往生することの出来るその功德をふりむけて、多数の人々のさいなんである旱害を救い下さいませと祈念するところに、一同の至誠心が現われる。至誠を捧げて回顧するところに、如来も諸仏も八部竜王も感應する、感應のあるところには所願成就する訳である。

かく見てくる時には、滝宮の法然上人念仏踊も亦百万遍念仏の花であり実である。祈雨靈験は、大師法然上人の本旨ではない。併し善意で行い、多数の人々の「不幸」「天災」を除き得ることは、期せずして出来た念仏の余徳である。

(H・M)

東西鐘談義

鐘（金にも通じる？）にまつわる話は数多い。永遠の時の流れの中で今年と来年の境が人為的に出来ているだけで宇宙の輪廻に境界は無いのだが、師走もおしせまると鐘を思いたす。そして除夜の鐘は我々日本人にとってしみじみと特に人生を感じさせる。

ここに、村上博了、高橋良和の両先生に鐘談義を御執筆いただいた次第。

鐘の音は人生の故郷

村上博了

夕やけ 小焼けで 日がくれて

山のお寺の鐘が鳴る

と斉唱する、健康日本のシンボルと云うべきか。

鐘は昔から現在に至るまで、人生の故郷へ通ずるものがある。

又鐘が鳴るは、お金がなるとも通じ、人生の花でもある。そして今年も暮れ除夜の鐘によって年が新たまる事になるのです。

★

かかる梵鐘のうち、名古屋以東で現在国宝になっているものは、鎌倉五山のうち円覚建長の二個寺のものだけである。重要文化財としては、東京世田ヶ谷井上源太、同井上恒一両氏所有のものと鎌倉長谷寺のものがあつる。井上恒一氏のものは陳国生れ、他はいづれも日本生れである。重文銅鐘は十七個ある。東京、青森、岩手に各一個、新潟二個、茨城、埼玉各県に三個、神奈川県に六個がある。

併し広く世人に親しまれているものは、東京都に多い、特に港区芝増上寺の大梵鐘は延宝元年十一月二十四日、品川御殿山生れで、

はえ抜きの江戸っ子、長さは一丈、口指渡そとのり五尺八寸、口厚六寸五分、蓮花坐廻り一丈八尺三寸、蓮花指渡九寸六分、四千貫目と云われ、名古屋以东第一の巨鐘である。鋳物師は椎名伊予守吉寛であった。椎名製の鐘は鐘の下帯が太く蓮実（撞坐）が大きい、音色は陽性で音波がゆるやかな特色がある。

旧増上寺鐘楼は桁行四間一尺五寸、梁間三間二尺五寸、柱十二本の堂々たるものであった。明治六年十二月大殿並諸堂と共に炎上してしまった、現在は仮堂である。

鐘声は遠く木更津までも海上を、ひびき渡ったと伝えられる。

この巨鐘が誕生した時の余り鐘で、一鐘を造り、現在の芝学園前方、都電御成門（昔増上寺御成門）と神谷町（紙屋町）とを結ぶ地点、当時切り通しと呼ばれたところに、時の鐘として親しまれたものであった。

明治初年のことである。新政府は、時刻を市民に知らせて、生活の便を図ることとしたのであった。然し如何にして、広く衆知せしむるか云う難問題に遇着したのである。政府と市（都）の幹部は、しばしば会合を重ね

た結果、天皇初入府御小休憩所であった増上寺の巨鐘を、活用しよう云うこととなったのである。

当時排仏毀釈の風潮の時である、忽ち増上寺をして献納せしめると云う交渉と相なった。増上寺一山では、坊中四十八カ寺住持を集めて、会議の結果、利用せられることは有難く了承すると云う結論に達し、速刻回答する。

市と政府では、早速山内随一の高所観音山に曳き上げて、時の鐘を実行する段取とは相成った。なんと云っても四千貫の大ものである、当時のこととてとうとう不可能事として沙汰止となってしまうた。

★

鐘は上野か浅草かと云う風流な言葉があった。きく人と聞く場所によって、面白いものがある。

浪曲ではないが、神田の生れだって、さあ喰いねえ飲みねいと云うことがある。浅草と神田は昔から江戸の中心盛り場であった。そのにぎやかな所にさえも、鐘の音色はしみ渡

っている。現在とちがって、閑静な街を考えることが出来る。

宝井其角が上野清水堂で、今を盛りのしだれ桜を見物しながら

鐘かけて 志かも さかりの

桜哉

と詠んだ風流が浮ぶ。

明け六の鐘は、正に希望の鐘である。東天を染めて五色に輝き行く旭日昇天のばん奏曲である。又寝床の中にあって、夢うつつの間にききながら、次第に目ざめ行く心持よさ、千金の価値がある。正に除夜の鐘と同ようである。

ラジオもテレビもない時代、諸寺院諸山で打ち鳴らす鐘は「本当に有難いかね」であった。増一阿含経に、

鐘を打つ時、又その音色をきく時、世の一切悪ともろもろの苦悩を去るとする説示がよく判る。

★

暮六つの鐘は、憩の鐘である、今日も亦無事であったとする、のびのびとした愛の鐘である。

又そろそろ火を入れて、入口にお塩を山形にもってとする家もあろう。鐘で時刻を知らせない、ただ腹時計ばかりが知る生活としたならば、がっかりで、なさけない。

戦時中の供出で、鐘楼が空しく立ち、帰えるあてない鐘を待っているとしたならば只淋しいものである。そのような鐘楼を眺めた古老は、

男の大切なものがい無ようだと嘆いたものである。

若し男性のシンボルがない男性と女性の世の中を想像した時に、悲哀の言葉がそのためのものである。

鐘が人生にとって、如何に大事であるかを教えている。

ここに寺院と庶民の「くさび」が常時あったのである。当時の寺院は現在の「学校」「役場又は区役所」「銀行」並に相談所までも兼行であったから、社会の灯であり、生きる光明であったのである。現在の寺院は社会生活の目として、少くとも一寺院一事業を持っていたき度い。又人々も心の故郷として、寺院を活用して貰いたいものである。

★

下総国伏木（茨城県猿島郡境町）に専修寺と云う昔の御朱印寺院がある。御維新前までは学寮も数字あり由緒寺院の一つであった。延宝四年に江戸椎名吉寛製作の梵鐘があつて、この時から毎日午前十一時に「時の鐘」を鳴らして現在に至っている。昭和十八年徴用され二十四年に再鑄するまでの間は休みであった。附近の農夫達が、夢中で畑田仕事の中に、ごおーんと云う鐘をきいては、とたんに腹の虫が収さまらない、農具を、ほうり出して、パクつく訳である。この鐘は僅か百五十貫ばかりであるが、十キロから十二・三キロは響くことで有名である。

鬼怒川河口の大利根から三キロほど上ったところに清滝寺がある。あたりは沼沢地帯で非常用にあてられて、大戦中も徴用をまぬがれていた。

比較的高いところにあるこの鐘は、鬼怒川とあたりのデルタ地帯にそって遠く流れて、大変に役立っている。

去年は上州太田大光院に、四百貫の大鐘が出来上った。同地の古い民謡に

わたしや 上州金山そだち

いつも貴方をまつ（松）ばかり

とある、金山を背にしたこの大鐘は、上州の平野を圧し、遠く近くにひびきわたっている。大光院開山吞竜上人の子育の慈愛に、なぞらえて、慈愛の鐘と呼ばれ、いつも、あなたを まつばかりである。

★

鐘に乳がある、百八個あつて、もろもろの障りとなる煩悩を洗うためとされる。ところが鐘が金に変って、金になる、金持ちになると福寿の鐘とされる信仰がすくなくない。

昔相愛の男女があつた。末は友白髪と二人の名前を、秘かに紙に書き、人知れず乳に結びと一緒になることが出来ると云うこともある。乳は子供にとって大切なもの、鐘の乳に若妻の「ねがい」を書いて結ぶと、乳が出るようになる云う信仰もある。

寺院で「みくじ」を求め、吉でない時には、かねに鳴きすてと結ぶ者もなきにしもあらず、そこには伝説と物語が多い。

（増上寺文化財部主任）

鐘の音は無常の調べ

高橋良和

へ花の外には松ばかり、花の外には松ばかり、暮れ染めて鐘や残るらむ。

の謠からはじまって、聞いたか坊主が出て幕があくと、けんらんたる舞台と共に次に耳に入るのが、

へ鐘に恨みは数々ござる、初夜の鐘をつくときは諸行無常とひびくなり、後夜の鐘をつくときは是生滅法とひびくなり、晨朝の鐘のひびきには生滅々已、入相は寂滅為楽とひびくなり、聞いて驚く人もなし、我も五障の雲晴れて、真如の月を眺め明さん。

とにぎやかにつづいていくのが「京鹿子娘道成寺」の一節である。

鐘に恨みは数々ござるの文句が出てくれる

のもこの長唄であり清元なのである。

この鐘というのは勿論道成寺の安珍、清姫の伝説による鐘のことをいい、その後の落慶法要の際に白拍子に化けた清姫の精が踊り狂うて最後に鐘の上にのぼって蛇身をあらわした鐘をさすのであるが、御本家の道成寺には、安珍がかくれて蛇身となった清姫のために溶けてしまってから鐘がなく、ただ鐘があった場所だけが残っているのだから道成寺の鐘は有名であるけれど、実は鐘のない道成寺ということである。

その後鐘がつくられたことがあったが、例の蛇身の崇りをおそれて、京都の日蓮宗妙福寺に鐘が身売されていることを知っている人

は少いようである。

鐘で名高くなった紀州の道成寺に鐘がないというのもまた面白いことである。

そこで住職の小野宏海さんが、この道成寺こそ、日本の歌舞伎を起し、芸術を培ったのである。まあ考えてみれば舞踊に、長唄に、常盤津に、義太夫に、清元に、小説に、戯曲、あらゆる日本の芸術に貢献したこの鐘を昭和の代に新鑄したいと計画して、日本の芸能界の人々に協力を求めてその鐘を再建する計画をすすめる、道成寺芸術発鐘（坐をもじっている）の鐘と名付けて鑄造をすることになっているが、小野さんの言うのに、この鐘は出来あがっても鐘楼には吊しません、これは勿論、人についてももらうのではなしに、その芸術の発生について縁由をたずねていただくのです。

というのである。鐘がない寺に、鐘が出来る。そしてその鐘は鳴らさない鐘である。というのも考えようによっては意味あることであらう。

関西には大きな鐘が三つある。一ばん大きいのは大阪四天王寺の鐘であるが、これはま

た少し音が悪いので名高い。だからときどき鳴らぬ鐘をたとえる悪口にひき出されるのであるが、鳴る鐘なら奈良の東大寺の鐘が一ばんだらう。

これはよく鳴る。観光客一つき十円でなかなかよく鳴らされている。大仏のお堂にこだますのだろうか、なかなかひびきがよいので人々に親しまれている。

奈良の東大寺につづいてよく鳴るのは知恩院の大鐘である。蕪村の句に「御忌の鐘ひびく谷の氷まで」という句がある。鐘のひびきにつれて京都の春があけて、かすみがたなびくなかに、きらびやかな御忌会がつとめられるその様子がわかるようであるが、鳴らすのは四月の御忌会と、十二月の大晦日の夜だけである。大鐘といっても、そこらにあるようなものではないのでなんとその重量は、一万八千貫というからすごく大きい。

だから一人では鐘の綱にふり廻されてしまうので、十五六人の人々が掛声もろともにつくのであるから威勢のよいことである。

除夜の鐘について年男になろうというので先年ワンサ押しよせてきて町のおんちゃんが

腕まくりして喧嘩が出そうになったので、その後は静かに寺内の若い人たちがつくことになったらしい。

毎年のラジオやテレビを賑わす知恩院の除夜の鐘は、東山の山ふところに抱かれているので、韻のこもりようもまた一入なのだろう。

鐘の音はこうして人々に知られているが、この鐘はまた徳川時代の代表的なものとして有名であって、先の奈良東大寺の大鐘にその範をとって作られたものだとも聞いている。

この鐘の出来たのは、今から三百年前の江戸初期であって、知恩院三十二世の靈巖上人の銘文があり、洛西妙心寺の黄鐘調（おうときちよう）と対比して洛東の名鐘でもある。ついでのことだが鐘楼は、鐘より大分おくれて、延宝六年十二月二十五日で、大体京都大仏殿のあの名高い「国家安康」の文字のある鐘とも同型であるということである。

大きいのが知恩院の鐘であるとする、古いのは妙心寺の鐘である。妙心寺の鐘は黄鐘調として知られていて、白鳳時代の銘がその

内側に刻まれている。即ち

戊戌四月十三日、壬寅収糟屋源造春米連云々

とあるがおそらく今の福岡県のことなのだろう。

この黄鐘調の基本振動数は、一二九、洋楽調で、うなりは毎秒四、五回、打撃後十秒にして、上音はなくなり基本音がつづくところにこの鐘の特長があるということである。そしてこの鐘の音のことをこうつたえている。

凡そ鐘の声は黄鐘調なるべし、これ無常の調子、祇園精舎の無常院の声なりと、まこと鐘の音は、無常をつたえつつ亡びゆくもののなかに亡びない真理をつたえてくれるようにひびくのである。

江戸の鐘もよい、然しすっかり近代文化に彩られた東京の鐘より、昔ながらそのままにある京都の鐘の音はまた一入である。

今年も除夜の鐘を聞くのももうすぐである。

移りゆくもののなかに一人静かに百八のこの鐘の音を聞き入りたいと一人思っているのである。

（筆者・中外日報記者）

無量寿経と法然上人

阿弥陀仏にもし此願なくんば、極悪の衆生何を以てか
苦海を離るることを得ん

(法然上人の無量寿経釈より)



石原 宥 政

法然上人が善導大師の著書をお読みになっ

て「かん悦髓えんずいにとおり、落涙らくるい」せられました

ことは、本当にあの「鎌倉」という、血なま

ぐさい時代を背景にして考えますと、ナルホ

ドと、はっきり判ります。平家物語の美しい

敘述ばかりでなく、「玉葉ぎよくよう」という藤原兼実かねざね

の日記にも、その文字と文字との間に、悲喜

こもごもな時代相がうかがわれるのです。

ところで、法然上人の、いや、浄土教の所

依の經典である無量寿経・阿弥陀経・観無量

寿経の、いわゆる三部経をいただいでみます

ると、まことに法然上人が、

「浄土の教えでなければ、人は、ついに救

われぬのだ」

と、深く感じられ、そこに頭初にかかげま

した「極悪の衆生」という人間実存のカルマ

(業)を諦観せられたことがわかるのであり

ます。

たとえば、観経におきまして、現実の父な

る国王ビンバシヤラを七重の密室にかんきん

して、これを餓死させ、王位を奪おうとした

太子のアジャセは、まことに悪の代表者であ

りまして、その夫なるビンバシヤラ王
に、おのがからだに蜜と和したものを
塗り、ヨウラクの飾りの中に蒲桃ぶどうの
漿のりをかくしもってはいこんでいた母の韋
提希だいぎを、剣を抜いて、斬殺しようとな
までするのです。

この悲劇的暴挙は、側近につかえた
忠臣である大臣の月光げつこうによって「是梅
陀羅だら」、つまり、最下等の非人ひにん以下の行
為であり、「われわれ、セツテリー種
をけがすものであり、ビダロン経に
は、父の王を殺害したことは書いてあるが、
未いま、母を殺害したという極悪者はない」と、
勇武な月光に、キツクたしなめられておりま
す。

そして、やがて母なる皇后もかんきんされ
るのですが、その悲愁の極、韋提希夫人は、
遙かなるギシャク山の釈尊せきそんに向って、拝をし
ながら、その胸中をうったえ、ここから彼女
を救うべく、観経が説かれております。

が、静かに拝読いたしますと、まことに法
華経けの常不輕菩薩品第二十の中にあります文
言ではありませぬが「得大勢とくだいせい(菩薩)、意こころに於

ていかん、爾の時の常不輕菩薩はあに異人ならんや、則ち我が身是れなり」とあります。

その我身さながらのすがたを、私達は、そこに看取することができなのです。

韋提希の子の不孝に泣く母――。

どんな悪を犯しても我意を遂行しようとする人間像アジャセ――。

そして、その犠牲者である父。

アジャセをそそのかす悪友。

これ等は、まことに、性こりない人間の「極悪面」を指摘し、描いていて下さるのがあります。

○

さらに、私達は、大無量寿経において、一層、み仏の教誡に接することができのがあります。

私は大経を拝読いたしましたして、四十八願成就して、すでに十劫を経たことと、そして、法蔵比丘の「我が行は精進にして、忍びて終に悔いざらん」という、雄大崇高な「無蓋の慈悲」を観ずるのでありますが、読み来って下巻の左の言葉に行きあたると、肅然として坐を正さずにはおられないのであります。少

しながくなりますが、文底の深みを味わってみましよう。

「何ぞ世事を棄て動行して道德を求めざる。極長生をえて寿楽極り有ることなかるべし。然るに世人薄俗にして共に不急の事を諍い、この劇悪極苦の中に於て勤身營務して自ら給済す。尊となく卑となく、貧となく富となく、少長男女共に錢財を憂う。有無同然にして憂思まさに等し。屏營として愁苦し累念積慮し、心の為に走使せられて安き時有ることなし。田有れば田を憂え、宅有れば宅を憂う。牛馬、六畜、奴婢、錢財、衣食、什物また共に之を憂い、重思累息し憂念愁怖す。横に非常の水火、盜賊、怨家、債主のために焚漂劫奪せられ、消散磨滅し、憂毒じゅうじゅうとして解くる時有ることなし。憤りを心中に結び憂悩を離れず、心堅く意固くして、まさに縦捨することなし。或は摧碎に坐して身亡び命終れば、之を棄捐して去り誰も隨う者なし。――略――人、世間の愛欲の中に在りて、独り生じ、独り死し、独り去り、独り来る。行くに當りて苦樂の地に至趣し、身みずから之に當り、代る者有ることなし。善惡變化し

殃福処を異にし」

と、哀しいまでに真実な人間の無慚さを教えて下さっております。

これを法然上人の御一生に對立して考えますと、この大経の言葉は、父を他人の為に殺害され、身、ひとり北嶺比叡をくだって、京の市井に念仏一門を樹立した上人の一生……ことに、その時代との関連がハッキリいたします。

上人は文治五年八月一日に、お年五十七歳を以て、摂政藤原兼実の邸において、念仏往生の教えを説いておられますが、その年の閏四月三十日には泰衡のために衣川の館で、義顯（経）三十一歳が殺されております。また七月十九日には頼朝が院宜を請うて、泰衡追討に向っておりますし、九月三日には寝返りした逆臣河田次郎の為、泰衡は首を斬られ、次郎は、その首を頼朝に獻じておるのであります。まことに「下剋上」もただならぬ、無道不義、ただ、自分のことのみを考え、因果をはつむしておったのでした。

その旭日の勢いに輝いておりました頼朝も、かっつきり十年後の正治元年一月十三日

に、わずか五十三歳で、此の世を去りました。続いて、頼朝の寵愛によって威勢のあった梶原景時が翌二年の一月二十日に誅伐されております。

ところで元久元年になりますと、(上人七十二歳)將軍の頼家二十三歳が、伊豆の修禪寺で弑殺されておりますが、この年の十月には、天台座主真性に宛てて、叡山の僧徒が、念仏を禁止せよと訴えております。この無法に對して、法然上人の門弟百八十余人は、制戒文(嵯峨の二尊院に残っている七ヶ条の起請文)を書いて、連署して、念仏の立場を釈明いたしておるのです。

けれども、反念仏の運動はひどくなり、翌元久二年の十月には、南都興福寺の僧徒が念仏停止を朝廷に訴えております。

そんな矢先、翌、建永元年十二月に、上人の弟子の住蓮・安樂の二人が、上皇の近侍の女性を入信させたことによって、上皇の逆鱗にふれ、翌、承元元年二月十八日、七十五歳の老軀をもって、上人は土佐に流罪せられたのであります。

上人は七十九歳の十一月に(建暦元年)に

(童)(心)(仏)(心)

冬の遊園地

冬の遊園地は悲しいもの。木馬は大きなあくびをし、ブランコはブルブルふるえていました。

「さびしいね。ブランコ君。夏はうるさい程に子供がいたんだがね。」

「ほんとに。火が消えたみたい。子供は静かなほうがいいと思っていたんだがな。」

やっぱり、ピチピチはね廻ってもらいたいね。」

その通りです。(うるさいね。お前達、少しは静かにしたらどうなの。)とか、(お隣の子を見てごらん。おとなしいったら、お前とは段違いだよ。)という、おかあさん。

ところが、病気にでもなつて、静かになると、或は、急にシュンとなると、(元氣を出すのよ。)とか、(どこか具合が悪いのではないの。)と心配する、おかあさん。

子供は、活動力そのもの。騒ぐ子程、元氣だといえましょう。(輝)

五年振りで、ゆるされて入浴しておりますが、十一月の二十日東山大谷の禪坊に帰還せられた上人は、二カ月後の翌年一月二十五日に、奇しくも、仏陀世尊と同じく、八十歳を以てお浄土に向かわれたのでした。

まことに、「極重の悪人」という意識、史観とも、御自覚とも申しあげたいお言葉は、

まさに大經の文言と合致しております、彼

の日蓮上人が法華經法師品の「如来の現在すらなお怨嫉多し」の言葉に、法華經の行者として勇躍起たれたのに対し、上人は人間業に徹して、大經の言葉を身証され、まさしく、謙虚にして、真実、且つ機に相應した易往念仏の一路をご実践になられたのだと察するのであります。

近代高僧伝

岩井智海伝



智海が筑前粕屋郡山田村の清流五鈴川のほとり、猪野というさびれた農村に、守河内市三郎の次男として呱呱の産声をあげられたのは文久三年（一八六三）五月のことであった。しかし彼の実家は余り祐福ではなかったために十三四才の頃には、何れか奉公しなければならぬ境遇におかれていた。時偶々朝倉郡甘木町の薬種問屋の主人稲永氏は非凡な智海の人となり、どことはなしに魅せられ、懇望されるがままに小僧として奉公することになった。明治九年のことである。

あった。月によつては三回も四回も行ったので、自然寺の人たちとも顔なじみになったが、殊に寺には同年輩の小僧がいた関係で、尚更に寺院の雰囲気をごよなく愛していた。この小僧さんこそ、後年共に浄土宗の学校に学び、机を並らべ、学道に精進した浄土宗界の一異彩東慈海其の人であった。薬種問屋の小僧智海も、いつか非凡な才能を福岡成道寺の住持岩井境譽に認められ、「何時までも商人の小僧としてゐるべきではない。寺に入れ、そして勉強せよ」というはげましの言葉に心

稲永氏は大そう信仰の厚い人で、先祖の毎月
の命日には欠かすことなく、檀那寺の浄土寺に供物を届けることを常としていたが、その際使
い走りをさせられたのは智海であつた。月によつては三回も四回も行ったので、自然寺の人たちとも顔なじみになったが、殊に寺には同年輩の小僧がいた関係で、尚更に寺院の雰囲気をごよなく愛していた。この小僧さんこそ、後年共に浄土宗の学校に学び、机を並らべ、学道に精進した浄土宗界の一異彩東慈海其の人であった。薬種問屋の小僧智海も、いつか非凡な才能を福岡成道寺の住持岩井境譽に認められ、「何時までも商人の小僧としてゐるべきではない。寺に入れ、そして勉強せよ」というはげましの言葉に心

入寺されてからの生活は極めて嚴格そのもので、既に人々の注目の的であつた。翌三十三年浄土宗大学林に入学したが、彼の私生活は貧しく、師僧も金がないので、思うだけの学資も送れなかった。極度にきりつめた生活は頗る悲惨であつたが、この貧にもめげず燃えさかつたのは信仰の炎であつた。「どうかして現代の人々に仏教を理解させたい」そして挙句の果てに心にうかんだ光明は「布教、伝道、そうだ、これのみが仏教の興隆に残された唯一の道である」という信念であつた。自分の受けた広大な仏恩にむくゆる道は布教あるのみである。現代人に仏教の真諦を教え、おとろえた仏教を復興させなくてはならない。これだけは自分の身命を賭しても成しとげたい。以来布教についての研究は人一倍はげしく、人の目をそばだたしめる程の熱心さであつた。

た。あらゆる講演会、ささやかな法話の席にも列して、研究に余念なく、ノートをとる、話し方を研究する、精魂をこめての勉強を寸暇を惜んで続けた。全国にさかんな勢力をもつて拡がりつつあるキリスト教の状勢を目にし、キリスト教の伝道法に勝れたもののあるのを看破し、その教義と布教法を学ぶために、キリスト教会の門をくぐったのも此頃であつた。

教会に出入し、その伝道法を研究すると、音楽が非常に布教の助けになつてゐることを知ることができた。讚美歌あるが故に、若い人々はキリスト教徒になるのだ。音楽は人の心をなごやにする、人の心を宗教的にする。仏教にはこの新しい西洋音楽がない、どうしても現代人を仏教に引き入れるには西洋音楽をとり入れることが必要である——こう決心した智海は破れ衣に身をつつんで敢然として、東京上野の森の音楽学校に通われたのである。明治二十二年九月の頃であつたが、上京はそれより前、十九年のことであつたという。

このような苦心もやがて実を結び、彼の弁才は衆目の認むるところとなつて、二十七年十月には日清戦役外征軍慰問使となり、大本営の従軍許可を得て、親しく満州の戦野に布教し、流れるが如き弁と燃ゆるが如き信仰の火は、幾多の将兵を激動せしめずにはおかなかつた。ために桂太郎大将よりは懇篤なる感



謝状を拝し、同三十三年には野上運海管長の命をうけ、管長代理堀尾貫務大僧正の御代説として、岡本貫玉師等と共に朝鮮及び台湾の開教状況を視察、布教されたのである。

全く彼の一生は布教の専念に終始し、布教のためにあらゆる努力をつづけられた。

明治三十一年堺の旭蓮社に董住、大正十三年には長崎大音寺に転じ、昭和七年二月一宗の公選によつて大木山清浄華院に進董、その四月大僧正となつたが、在山僅か二カ年にして同九年三月増上寺法主となつた。四月十一日には増上寺に晋山したが、偶々その日山下現有大僧正の訃に接し、一宗は挙げて智海を管長候補に推したため、十月二日には晴れて浄土宗管長となり、十八日知恩院八十世の法灯を継いだのである。以来地方の親教に寧日なく、足跡は遠く満洲朝鮮にまで及び、内にあるは三上人遠忌の厳修、大方丈小庫裡の修築等山内の経営に當つたが、偶々同十一年九月横浜光明寺に巡教中病を得て帰山。翌十二年十月管長職を辞して自坊旭蓮社で静養してゐたが、静養中とはいへ訪ねる人があれば、近侍の留めるのも耳にせず、喜んで法を説かれたという。同十七年五月二四日彼は八十七才の長い生涯を終えた。法名は旭蓮社大僧正願誉上人無涯底阿鈴泉智海大和尚。

(大橋俊雄)

般若心経

——經典解説(七)——



数多い仏教經典の中、わが国の民衆に最も親しまれて来たものは、何といっても阿彌陀經・觀音經・般若心経の三つであります。中でも般若心経は、宗派の別なく、最も広い階層に普及しております。また、わが国だけでなく、インド・シナ・チベット・蒙古・満洲・中央アジア各地でも盛んに用いられたと見えて、サンスクリット本をはじめ、各語に訳されたものが幾通りも現存し、註釈書の類も夥だしい数に上ります。漢字にしてわずかに二百六十二字という短いもので、読誦・書写が極めて容易

の第一の理由は、大乘仏教の根本教理である般若空の思想が、これだけのものに凝集されてあるというところに求めなければなりません。

「般若波羅蜜多の心髓」といわれるこの經典は、華嚴經・法華經・無量壽經等と共に、大乘經典の初期のものとされております。各種の大乘經典の中、般若經典といわれるものは、大小多数の同一思想系統の經典を總称したものです。維摩經・金剛般若經・理趣經等もこれに属します。大般若六百卷といわれるものは、これら大小の般若經典を、やや後代になって集成したものです。羅什の漢訳したものに大品般若といわれるものがあり、般若心経は、この一節を別出してつくられたものであると現在推定されておりますが、般若心経には、長短

であることや、觀音信仰と結びついたことなどは、この經典普及の大きな理由でもあります。しかし、何といってもそ

二種あって、現在普通に用いられているのは、玄奘の訳になる短い方です。長い方は、「如是我聞一時仏在王舍城……」に始まり、「……皆大歡喜信受奉行」で終るという、一般の經典体裁をとっておるものですが、勿論、内容に大差はありません。折角サンスクリットの原典もあり、短いものですから、ここに和訳してみましよう。

般若波羅蜜多心(經)

一切智に歸命す。

聖なる觀自在菩薩は、甚深なる般若波羅蜜多において行を修せしとき、照見したまえり、五蘊ありと。而して此等を自性空なるものと見たまえり。

舍利子よ、この世においては、色は空にして、空こそ実に色なれ。空は色と異なるものにあらず、色は空と異なるものにあらず。色はこれ空なり、空はこれ色なり。受・想・行・識もまたかくの如し。舍利子よ、この世においては、すべての存在は空なるものなり。生ずることなく、滅することなく、汚ということな

く、淨ということなく、減ずるということもなく、増すということなし。

この故に、舍利子よ、空の中には、色なく、受なく、想なく、識なく、眼・耳・鼻・舌・身・意なく、色・声・香・味・触・法もなし。眼界なく、乃至意識界もなし。明なく、無明なく、明の滅尽することなく、無明の滅尽することもなし。乃至老死なく、老死の滅尽することもなし。苦・集・滅・道なく、智なく、得なし。得るといふことなきが故に。

菩薩は、般若波羅蜜多に依りて住し、心に障礙なし。心に障礙なきが故に恐怖なく、顛倒の状態を脱して究竟の涅槃に到るなり。三世に住する諸仏は、般若波羅蜜多に依りて、無上の正覺をさとりたまえり。

この故に知るべし。般若波羅蜜多の大きな讃詞、大いなる知の讃詞、無上の讃詞、無比の讃詞を。こは一切の苦厄を消除するものにして、嘘偽ならざるが故に真実の声なり。般若波羅蜜多の中にいて語られし讃詞なり。即ち、

行きて行きて、彼岸に行ける、

彼岸に到れる覺よ、スパーハー

漢字を棒読みにしたのとは違って、經典もぐっと身近かなものになり、意味もはっきりしてくるでしょう。經典は意味がわからなくとも、読んだり、書き写したりするだけで功德があるのだという考えもありましたが、それは愚民主義ともいふべきもので、現代には通用しません。意味がわかって（完全には行かなくとも）その教典の教えていることが、我々の日常の生活に生かすべく努力され、我々の心の支えとなつて、始めて經典は生きてくるといわなければなりません。

さて、般若經典の成立にはじまる大乘仏教は、紀元一世紀頃から次第に隆盛となつてきますが、もともとこの大乘仏教の運動は、既成の仏教教団の保守的消極的傾向に對抗して生れて来た仏教革新運動であります。即ち、釈尊の滅後、二百年たち、三百年をすぎるにつれて、仏教教団は、次第に発展し、社会的に大きな勢力を持つに到りました。しかし、多くの教団部派は、王侯

貴紳の寄進になる広大な莊園をもち、僧院や深山幽谷に坐禪冥想し、釈尊時代の激烈さを失った出家中心のものとなって来ました。また、釈尊の教えに忠実なあまり、經典の一字一句の解釈研究を重視し、暇にまかせて繁瑣な教理の議論と研究に没頭していました。教理の点でも、最も有力な部派であつた説一切有部の如きは、一切諸法の実有を主張し、輪廻の主体としての我をたて、釈尊正覺の内容とされる十二因縁にしても、當時の通説であつた輪廻転生の考えに引きずられて、三世兩重等の通俗な因果説に墮し、次第に釈尊の教えの真意から離れたものとなって来ました。また、この世の苦からの解脱には、幾生涯にもわたる長い修行が必要であるとし、更に、その細かい段階などを論ずることに熱中してしまつた。こうした既成の教団に対して、進歩的な仏教徒や在家の熱烈な信者たちがあきたらなく思つたのは当然でありましょう。ここに新しい理想主義的な仏教運動がおこつて来ました。この人たちは、既成教団の人たちを、自利をのみ求める小乗の徒として

非難し、自らは大乘と名のつて在家主義の運動を展開したのです。やがて、雄大な構想に基く大乘經典が次々につくられるのですが、この諸經典の教理の基礎となったものが、般若經典に述べられる「空」の思想です。もう一つ重要なことは、既成の教団では、仏とは釈迦一仏をいうのであって、普通の人は仏にはなれないのですが、大乘仏教徒は、誰でも仏になり得ると主張しました。菩薩という理想的人物を創造し、誓願をたてて、利他行を行うものは誰でも菩薩であると考え、それを証明するために三世十方にある諸仏を明かしました。生きながら正覺を得、しかも此岸にあって衆生済度に献身するという菩薩の姿こそ、大乘佛教の理想であり、我々の目標とするところといわなければなりません。

ております。勿論、それは見る人の自由であります。大乗仏教の本意からすれば、あくまで菩薩行と離れたものではないのであります。自分が救われることよりも、先ず他人を救うことを願う慈悲の利他行、絶対の無我行の、実践的依りどころとなるものこそ般若波羅蜜多であり、空の認識に他なりません。般若經典では、特に「空」を強調して説くために、ややとすれば闇夜に黒牛の如く、何の見境いもなくなってしまうこと、あるいは、何ものも空に帰するというニヒリズムの如くに誤解されがちなのは残念なことです。般若經典が、空を専ら説くのは、既に述べたような、既成教団に対する理論斗争の所産であるという事情によるもので、釈尊の説かれた「無我」を一属強調し発展させたものであります。大乘仏教徒の意図するところは、釈尊の言葉とされる片々たる經典の字句に拘泥するよりも、正覺の境地に直参しようとするところにあったから、その境地である「無我」を「空」と言い直したものと考えられます。どうして無我をそのまま用いなかった

扉の御法語

阿波介は安房之助ともいい、陰陽師で伏見に住んでいました。その頃七人の妻妾をもち飲酒にふけり、放縱の日を過していました。ある時播磨に赴かんとして路に迷い、大変な苦勞をした結果、フト道心を起し、宗祖上人の許に参じたといひます。上人に導かれてからは、彼は熱心な念仏行者として知られるに至りました。

上人の御西遷の後だと思われませんが、彼は金光上人を訪ねて陸奥に旅立ちました。その途中で中尊寺（岩手県平泉町）に詣でて、その莊嚴に目をみはりました。これこそこの世の極樂を見る思いをし、遂にそこを去り難く、中尊寺に止って一生を終りました。今なお中尊寺側にある碑が彼の墓所であります。

彼は愚鈍であるが正直なところがありました。お念仏を申すのに便利だからといって、二連念珠を發案したのは彼でした。御伝に

「阿波介、きはめて性鈍に、その心をろかなれども、往生の一大事心にそみぬるゆ

のかというと、既成の教団でも用いているその言葉との混同をさけ、更に否定的な響きを持つこの言葉を選んだものでしょう。

諸悪莫作 衆善奉行

自淨其意 是諸仏教

といわれます。例えば、我々も何かいいことをしたいと考えます。しかし、こうすれば、どう思われるか、どんな報いがあるというのか、そんなことをしては損だ、というような心のこだわりが我々の行動を邪魔して、いいと思ったこともやらず、しなければならぬことも渋って下い勝ちです。

あるいは少し何かをやるとすぐ自慢したがつたり、その報いを期待したりします。これは我々の心に我執が常につきまとうからで、空とはこのような我執が安全にのぞきさられた状態をいうのです。この自分が、という考えは間違っている。この自分というものは本来は無い自分にとって、よいことをするとか、その報いとかいうものはありっこない。自分もなければ、救われるという他人も無い。無いものであるから涅槃もなければ生死の苦しみもないものなの

だ。あるのはただ無心の慈悲行だけだ。そこにはただ永遠の生命の躍動がある。この完全な認識が般若波羅蜜多、即ち智慧の完成といわれるものです。ここにはニヒリズムの一片だにありません。般若心経の觀自在菩薩（觀世音、觀音）や、法華經に出てくる常不輕菩薩、あるいは、華嚴經に出てくる善財童子、無量壽經の法藏菩薩等、みなこうした智慧を完成し、無心の慈悲行を行じているものであります。それ故にこそ般若波羅蜜多是諸仏の母であるといわれ、空思想が、諸大乘經典の基調をなすものであるといわれるのです。

我々が般若心経を読む場合、これらのことを念頭におきながら、われもまた菩薩たらん、われは觀自在菩薩なり、の覚悟をもって対するならば、この短い經典も、新たな感激をもって眺められ、生き生きとした活動のエネルギー源として理解されてくるのではないでしょう。

（齊藤精也）

へに、かかる事をも案じ出けるなり。まことにこれたくみなりとぞ、ほめ仰らせける」とあります。

ある時、上人は聖光房に「あの阿波介が申す念仏と、源空が申す念仏と、いづれかまさる」と問われましたので、聖光房が「ても上人の念仏にかなうものでありません」と答えました。すると上人は強く聖光房をたしなめられ、「日来浄土の法門とては、なにごとをきかれけるぞ」といわれ、扉の御法語に続きます。また別の御法語に、上人の念仏と阿波介の念仏と違うと思う人は「つやつや念仏をしらざる人なり」といわれ、黄金は錦に包まれていようと、わらで包まれていようと黄金であることとに違いはないと申されています。

今かりにローマ法王の祝福と田舎牧師の祝福と同じことだといったとしたら、どうなることでしょうか。仏教の各宗派をみても同じことがいえます。

愚直の代表選手にされた阿波介には気の毒ですが、上人が御自分の念仏と彼の申す念仏と全く同じことであると仰せられたことについて御伝第十九には

「宗義の肝心いまさらなるやうに、ただ尊くおぼえて、感涙をもよほしきとぞかたり給へり」とあります。

静かにじっくり味わいたいお詞です。

聞きかじりの記

—南の国の風俗奇談—

秋 松 子

そのとき、友人がフト思い出したことは、かれらインド人は、みなおとなしいので、強気の日本人を恐怖している、ということである。日本人は、つよく、しかも誰れでも柔術をもって投げとばされ、また腹切りの名人である、と思っている。ジャパン、ヤワラ、ハラキリという日本語をかれらは知っている。腹切りとは、自殺の

インドの早婚は有名である。男は七才、女は五才ぐらいで結婚式をあげる。しかもその結婚式は非常に盛大におこない、そのためかれらはみな破産の状態になり負債に苦しんでいるのだそうである。おおくは冬の涼しい季節をえらんで、空地にテントを張ったり、あるいは青空会場で周囲に幕をはりアーチをこしらえて式場をつくる。冬は乾季で雨はほとんど降らないからテントの必要もないのである。音楽隊がにぎやかに奏楽し、おおぜいのインド人が集って大さわぎをして通行人をよびこむのだという。

あるとき、わたしの友人が急用があつてい

そいで行くと、あいにくブーカブーカドンドンという例の大さわぎの結婚式場が行く手にあつた。これは困ったナ、と思いながら、路の片すみをソート通りすぎるようとする。と、二、三人のインド人が式場のなかからわざわざ反対側のその友人のところへ来て、ぜひ式場に来て祝ってくれ、美味しい飲みものや食べものも、楽しい音楽や舞踏もあるから、ちょっと立寄ってくれ、と入場をすすめる。友人は、いまいそぐから見逃してくれ、というが、なかなか通さない。しまいに腕をにぎって引張りこみにかかってしまい、友人もホトホト困ってしまった。

意味よりも人殺しの意味に使われ、日本刀で平気で人殺しをする国民として恐怖の目標とされていたらしい。わるいインド人が、自動車やトンガ（馬車）などで不当な賃金を要求されたり、わざわざ同じ路をぐるぐる廻って、なかなか目的地へ達しないようにするとかきなど、大声で、ジャパン、ハラキリとどなってやれば、大概の悪党でもおとなしくなってしまうという。日本人は、つよくてすぐ腹切りをすると思はれていたからである。

そこで友人は、この結婚式をにげだすにはこの手を使うほかはないと思い、ジャパン、ジャパンと叫んだ。このおどしが効果があつ

ひか、大声でなにやらさげんだと思ったら、また式場のなかから、四、五人のインド人がでてきて、シャニムニ彼れをかかえこんで式場につれ込み、大せいでとりかこんで頭をさげ、合掌してその友人をおがみ、あなたが日本人と聞いては見逃せない、われわれの名誉だからぜひこの式に立合ってくれ、この式にアジアの先進国日本人を迎えたことは無上の光栄だ、という。まったく逆効果となつてしまった。

やむをえず式場にはいったわたしの友人は、かれらが、どんなことをするのか見学していた。すると、なにか歌ってくれという、なにも芸がないというとソプラノでもいいからやれという。大変なハシャギかたである。かれらの音楽も舞踏も、ただ騒々しいだけで興味はない。

それよりも、友人が気にかかったことは、いったい花嫁と花婿はどうしているだろう、ということだ。日本の場合なら、床の間のまえか、メインテーブルの正面に、金らんとんとに美しく着かざって上気している二人の姿をみることができると、インドでは、どこに

いるのか花嫁花婿のすがたがわからない。苦心して方々をさがしていると、ようやく片すみにいるのを見つけた。

なんと、花嫁花婿さんたちは、仲よくオモチャをもって遊んでいるではないか。見れば男は七才、女は五才ぐらいだ。これではいくら早熟のインド人でも人生のわかるはずがない。真の夫婦生活に入るのは早くて十六、七才だという。伝統を尊び、家を絶やさないとめに式をはやく挙げておくのだそうである。家のための結婚だともいえる。

しかしこまったことは、いったん結婚式を挙げた女は再婚を許さないことである。暑いインド、悪い病気の流行するインドでは、子供は過半数が死亡するので、ここに若い後家さんがたくさんでいることだ。五才の未亡人は一生不幸な生活をしなければならぬ。インドでは、高貴な富豪の奥さんでも、主人が死ねばたちまち下女の位に落されて、一生しいたげられた生活をしなければならぬ。インドの未亡人は一大道問題といわれている。五、六才の未亡人は、ほかの少女に比較してリボンも小さく、みじめな有りさまで一

見してみわけがつく。

インドの婦人はヴェールをかぶっている。

男には顔をみせないのだそうである。男に顔をみせるのは一生にただ二人だという。夫と夫の父（義父）だけであつて、ほかには兄弟でもみることが許されない。実に窮屈なものだ。滑稽なことは劇場でも女はいない、いな機敷に簾をたれ幕を張っているという。汽車も男女は別で婦人専用車がある。しかし、かれ等は無学だから窓に婦人のすがたが画いてあるときく。

あるとき、友人が貴族の婦人が駅へ車でやってくるのに出会ったが直ちに待合室へ入ってしまい暑いのに閉めきっている。しかし、汽車がきたからこんどは裸足かいなかぐらいは分るだろうと、見れないとなればなお見たくなるものでおおいに期待していると、汽車の婦人専用車がちょうど婦人待合室の前に止まり、従者は、その室から車まで幕を張って微かな音のほか足も見えないので、友人はいささか失望したということである。



釈尊の生涯

(五)

佐藤密雄

拜火教徒の集団改宗 ペナレスで、はじめて説法された
仏陀は、五比丘をともなつて、王舎城へ向つて出発され
た。王舎城は、かつてそのあたりで、仏陀が出家以来成道
までの生活を送られたところであり、また、インドの中央
ともいふべきマカダ国の首府であつた。

新宗教である仏教が、中央の大サンガとなるにはぜひ根
拠地とすべきところであり、さらに、仏陀には王舎城主ピ
ンビサーラ王に対しては、成道のよろこびを伝える約束を
してあつたのである。ペナレスから王舎城にむかう途中で
も、長者の子ヤシヤや、その友人の出家するものがあり、
そのほかの帰依者もあつて、王舎城のちかくに達したとき
は、およそ六十人の出家者からなるサンガとなつていた。

そこで、仏陀は、仏教を一層ひろく伝道すべきであると
して、六十人と合議して、六十人が六十の地方にむかつて
仏教を伝たえようとされた。二人が一処にむかうことがな
いようにして、伝道を開始されたのである。そして、六十
人が、それぞれ伝道の旅に出かけると、仏陀もひとり王舎
城に入り、まず最初に、拜火教徒に仏教を説いて、一挙に
一千人の拜火教徒を集団改宗させた。王舎城の拜火教徒は
仏陀成道の地ちかくのウルベラ村に住する、ウルベラ迦
葉、ナデー迦葉、ガヤ迦葉の迦葉三兄弟が指導する一千人
の出家集団であつた。仏陀が單身伝道にむかわれたのは、
三人のなかの長兄ウルベラ迦葉のところであつた。
仏陀は、ウルベラ迦葉に法を説いてこれを弟子としたこ

とから、ほかの二人の弟も弟子となり、それにしたがって、一千人の弟子が集団して仏教へ改宗したのである。しかし、このときの仏陀とウルベラ迦葉との問答は、仏陀の生涯で、二度とない努力をはらわれたものである。伝えるところによると、仏陀と迦葉とが神通神変を競うこと数日におよんだといわれる。神通とは、知識の窮極に達した洞察力をいうのであり、神変とは、その神通力によっておこなわれる超人的なはたらきである。水なきところに大河を現じ、水中に大火をみせるがごときをいうのである。このような能力をかたむけて数日間を論争しあつて、ついにウルベラ迦葉は仏陀の弟子となった。

今日、インドにのこる古い仏教美術のなかにも、この伝説の様子を調刻したものが多く、仏陀の伝道史上の大事実であつたことを物語っているのである。おそらく、この伝道の意味するところは、仏陀と迦葉が、知能のかぎりをつくして論じあつたことと、この仏陀の迦葉を説得したことが、きわめて重大であつたこととである。仏陀は、このとき以後その生涯のなかで、他人を説得するのに、談を重ねて説かれることも、長い時間を必要とされることも、一度もなかつた。すると、仏陀が説得するのに数日間を用いられた相手のウルベラ迦葉も、また時代の一流の思想家であつ

たものであろう。仏陀が説得に数日の努力を用いられてウルベラ迦葉が仏弟子となつた結果、二人の弟も相ついで仏弟子となり、また三人の弟子である一千人の出家者も、三迦葉につづいて仏弟子となり、仏陀はこの一千人を象頭山に集めて、説法して仏教を授けられたといわれる。

そして、このように一千人の拝火教徒を仏教僧伽へ改宗入団せしめたこと、王舎城周辺で最高の宗教家とされたウルベラ迦葉を弟子とされたことは、仏陀をして、たちまちに王舎城の宗教界の第一人者たらしめたのである。

ピンピサーラ王訪問 仏陀は、かつての約束にしたがつて、王舎城にピンピサーラ王を訪問、成道して仏陀となつたことを告げられた。王は、ウルベラ迦葉以下一千人の比丘たちをしたがえた仏陀の威容に感歎し、さらにその教誡をうけて感激して、城外に精舎を造営して献じたのである。これが仏教における精舎のはじめであり、経典などに竹林精舎とよばれているのがこれである。

仏陀は、ここで成道ののち二年目と三年目の雨期を安居せられたといわれる。雨期の九十日間というのは、四月十五日から七月十五日まで、あるいは五月十五日から八月十五日までの間で、この期間は、出家者が一堂に集って修養につとめるのである。元来、出家者は仏教の比丘にかぎら

ず、雨期がいはいは一处不住の生活であり、各地に教えをつたえる伝道の旅をつづけるのである。仏教では、伝道には原則として二人いっしょに行ってはならないと定めているほどである。

そこで、これらの比丘たちが仏陀のところに集まって、法をききつつ修養につとめるのは雨期九十日間だけであつて、これを安居という。もちろん、雨期安居をするようになったのは、この期間は雨が降りつづけるために、河水などのはんらんで歩行が自由でなく、また草木や虫などの発生もはげしく、歩行するときに殺生して持戒をおかす心配があるので、雨期九十日間を全比丘が乞食してもさしつかえない村や町の外護者のある地方で、集団して修養生活をするのである。

したがって、竹林精舎のようなところで、仏陀を中心に比丘たちが生活しているのは、だいたい雨期九十日間の安居か、もしくは安居がおわって伝道にでるために衣服を準備している間の生活である。

舍利弗・目連の入団 仏教サンガは、拝火教徒一千人を改宗させて大教団となったが、さらにのちに、仏陀の一双の弟子と称せられる舍利弗と目連とが、二百五十人の弟子とともに集団改宗することがあった。

舍利弗と目連とは、当時の宗教界に知られた秀才であつた。ある日、舍利弗が仏陀の弟子のアッサジ（阿説示）の威儀正しく乞食するすがたに会い、問答をかわして仏教サンガと仏陀の様子をきいた。そして、友の目連と語って二人が相いたずさえて仏教へ改宗することとなった。

仏陀の時代には、有名な六人の沙門があつて、おのおの出家の弟子の集団を所有し指導していた。これを仏教では六師外道という。外道とは仏教を内道指導するというのに対して、仏教以外の学派をいうのである。舍利弗と目連とは、この六師外道のなかのサンチャヤという沙門の指導する学派に属する出家であつた。そこで、この二人が仏教のサンガへ改宗することになって、その学派の人びとに告げると、二人を崇拝していたもの二百五十人が、二人にしたがつて仏教へ改宗することとなった。これは、さきに拝火教徒が一千人で集団改宗したのにつぐものであつて、仏教の僧は急速に増したのである。

また当時、名声の高かつた舍利弗と目連を改宗参加せしめたので、さきに入団した三迦葉とともに人材のうえでもおおいに強化されることとなった。しかし。このようなことは仏教以外の教団のねたみをうける結果となり、とくに改宗者を出した教団のうらみも買ったようである。外道の

人びとがいろいろな工作をして、あるいは少女に妊娠を粧わせて仏陀の子をやどしたといわせたり、あるいは比丘尼の死体を街頭にさらして、仏陀の弟子は比丘尼を犯してこれを惨殺したというように吹聴した。おそらく、仏陀の教団の急速な発展に対する反感からであったと考えられる。しかし、このようなことがあっても、仏陀はそれを弁明するようなこともなく、弟子たちをいましめて、黙然として、自然に無根の事実であることが明らかになるのを待たれたと伝えられる。

仏陀の故郷訪問 仏陀は、成道ののち三年後になつかしい故郷、カピラバツツの城を訪れた。一週間滞在したが、その間に、父のシュードダーナ王、養母のハジャハダイ、および妻のヤシヨーダラに法を説いて、仏教に帰依させた。父王の後継者としては、仏陀の子、ラゴラは仏陀のもとに出家させて、養母の実子、ナンダ（難陀）を太子とするよう進言して、そのように定められた。このように仏陀は自分にかわる家系の相続を定めたので、ラゴラを引きとってカピラバツツを出でて、王舎城へと向われたのである。しかし、弟のナンダは太子たることをよろこばず、仏陀のあとを追って出家し、ついに仏陀はナンダをも出家させて故郷を去ることになった。おそらく、釈迦族の政治上の困

難さが、ナンダは太子たることをこのまなかつたのであって、仏陀もそのことを感じて、出家を許されたものである。

仏陀の故郷訪問は、このように、シュードダーナ王のあとを継ぐべき弟のナンダと、子のラゴラを出家させて手もとに引きとることとなってしまうた。さらに、故郷を出て王舎城にかえる途中、仏陀を慕ってきた一族の青年たちの、阿難や提婆達多や、その他数人のものをまた出家させて弟子とすることになった。これで一族の青年たちの大部分のものが、仏陀の手もとで出家弟子となって生きることになったのである。

仏陀のサンガは、通常釈子のサンガとよばれたが、これは仏陀が釈迦族の出身であったからで、釈迦族のものが多く出家したからではないのである。しかし、仏陀が、ひとたび故郷を訪れてからは仏陀の一族のほとんどが、そのうちも相いついで仏教へ出家して、人的にも釈迦族のサンガに近いものになったようである。

仏陀が成道から五年後にも、故郷の農民の水争いの調停に帰郷されたのであるが、このときにも、カピラバツツ城とコーリー城のクシャトリア階級のものが二百五十人も出家したといわれる。カピラバツツは仏陀の出家したところ

であり、コーリー城は母の生家である。クシャトリヤの階級といえ、仏陀血族の人びとにほかならぬのであり、それが二百五十人も出家したとすれば、二つの城の支配階級の大部分が仏教のサンガに入ったことになるのである。

父王の死 仏陀の父であるシェードダーナ王も、成道五年後に、七十九才で急病で死去された。これには仏陀とナンドとラゴラの三人が会葬されたが、シェードダーナ王の葬儀がおわると、養母のハジャハダイと妻のヤシヨダラをはじめとする一族の女性たちが出家をのぞんだのである。

当時の出家教団のなかには、すでに女性の出家者のある派もあった。伝えるところによると、仏陀は仏教に女性のサンガをつくることをこのまなかつたようである。おそらく、女性には出家としての修行をなすには、体質上にもいくつかの困難があるのであって、さらに伝道のために辺鄙の地をひとり旅をすることにも、人里はなれた閑静処で坐禅をすることにも、現代以上に当時は危険が感ぜられたのであろう。そのため、いくどか拒否されてたが、阿難などの一族出身の弟子たちのつよいねがいもあって、ついに許されることとなった。

ここに、仏教には、すでにあった男性の出家者の比丘サンガのほかに、女性の出家者の比丘尼サンガが成立するこ

ととなった。そして、このハジャハダイなどの出家で、仏陀の血縁上の一族の男女のほとんどが、すなわち私たちが仏教の記録の上で考えうる一族のすべてが、仏陀のサンガへ出家入団したことになるのである。

舎衛城 さきにのべた王舎城のピンビサーラ王が、仏陀に献じた竹林精舎は、中インドの大国であるマカダ国の仏教の中心地である。仏教は王舎城を中心に、まずマカダ国にひろまったと考えられるが、このマカダ国の西北方にあるコーサラ国は、当時のインドにおいてマカダ国とともに三大国であった。

仏陀は成道四年目に、このコーサラの首府である舎衛城へ教えをひろめる機会をえた。それは、舎衛城の財閥であり、大蔵大臣のような地位にあるシュダッタ（須達多）という人があって、この人は貧しく孤独なめぐまれない人びとに物資をあたえていたので、給孤独長者と呼ばれていた。この長者に七人の男の子があって、その第七の男の子によき嫁をえようとして王舎城の知人のところへ、はるばる訪ねて来たのである。ちょうどそのとき、知人の家では明日に仏陀と弟子とを迎えようとして準備中であつたので、はからずも長者は王舎城に釈迦族出身の大沙門仏陀のおられることを知った。シュダッタは、翌朝竹林精舎を訪れ

て仏陀におしえをうけたが、そのとき竹林精舎がマカダ国から奉獻されたのを知り、コーサラの首府の舎衛城にも仏教の精舎を建設して仏陀を迎えようと決心したのである。

シュダッタ長者は、舎衛城に仏教精舎を造営する意志のあることを申出た。この造営の指導のために弟子の一人を派遣されるようねがったので、仏陀は舍利弗に命じてシュダッタ長者と同伴して舎衛城へ行かせた。舎衛城にきた舍利弗は長者といっしょに城の内外に土地をもとめて、祇陀太子の所有地が最適地として選ばれた。しかし、太子はこれを仏教の精舎の地とすることには容易に同意しなかった。そこで、長者はいくどか折衝したのちに、ついに祇陀林全部に黄金を敷きつめて買いとったと伝えられる。長者は、ここに三百戸に相当する大房と禅房六十三処をもつ大精舎を建設したといわれる。

このような伝説の真偽は別として、おそらく、シュダッタはその全財産をかたむけて、精舎を造営したことであろう。これが有名な祇園精舎といわれるものである。祇園とは、祇陀太子の所有の園林の意味であって、そこに立てられた精舎であるから、祇園精舎というのである。おそらく仏教史を通じて、インドはもちろん、中国、日本にも例のない空前の大精舎であったと想像される。現在はサヘト・

マットというところであるが、その精舎のあとに埋設されているものが、すくなくあるといわれている。

この祇園精舎ができたことによって、仏陀はコーサラ国にも教えをひろめることとなり、やがて国王のハシノク王（波斯匿王）も仏陀に帰依するようになった。仏教は、マカダとコーサラの二大国の国王の帰依をうけて、教線をはることができたのである。

今日、われわれが有する仏教聖典を三蔵という。三蔵とは、経蔵と律蔵と論蔵のことである。このなかに、第一の経蔵とは仏陀が成道から入滅までの四十五年間に、各所でなされた説教を、仏陀にしたがって聞きおぼえていたものを、仏陀の滅後に編集したものであり、その数は千を超えている。律蔵はまた、仏陀が弟子たちに非行のあったたびにいましめられた禁律や、弟子たちの共同生活に必要な規則や、また、サンガを統制ある教団としていく方法などについて、仏陀が説かれたものを集めたものである。さらに論蔵というのは、弟子たちが仏陀の説教を研究整理したものである。

経蔵と律蔵のなかにのべられているものは、すべて仏陀が四十五年間に説かれたものであり、とくに經典の記述によると、王舎城と舎衛城とで説かれたものがもっとも多

い。おそらく成道五年目頃から仏陀の伝道の活動は、マカダ国とコーサラ国とにまたがって盛んになったと考えられる。今日の経蔵と律蔵とに記されている、いろいろな事実や説教のかずかずがおこなわれたのであろう。

しかしながら、これらの經典や律蔵には、年代が記されていないから、この豊富なおしえや事件の記述があるにもかかわらず、これを伝説的に構成することができないのである。經典のなかには、他人の幼児をとって食う鬼子母神といわれる女や、師から千人の人の指で冠をつくるよう命ぜられて、人を殺すごとに指をとる指曼外道と称する男を、仏陀が導いて正しい仏教生活にひきいれる話があり、そのほか、王や大臣や、または庶民にいたるまで、あらゆる階級の人びとをすくい導いたことはかぎりないが、これはいつ頃のことであるかは知りがたいのである。

仏陀は、伝道生活二十年をすぎて齢五十五をむかえられ、ようやく老境にはいられたが、いよいよ教化の活動は繁くなり、秘書（常随という）を必要とされ、阿難がその任に選ばれた。阿難は、仏陀が八十才にして入滅されるまで、常随したのである。仏陀も平素、伝道の旅はほとんど一人であったが、五十五才をすぎてからは、この秘書の阿難との二人で伝道の旅にあるかれたようである。

ムダの活用

廃物利用でゴミゴミしているより、現代は時間の活用を考えるべきです。時間を生かして使って、その収入で新しい物を買うくらいに積極的に考えたいものです。日本人は物は大切にしますが、時間は粗末に使う。これは戦前物の無かったときの遺風で、物の豊富な現代は時間が大切だ、能率的に働こう、という時代です。

でたために訪問をして、相手の留守に出くわす。面会の作戦が十分たっていないまま訪問して、会ってもらえない。あるいは面会しはしたが、準備不足で注文がもらえなかった。こんなムダにすごした時間を、丹念に計算すれば、たいへんな時間のムダになります。時間はチリと金の音を立ててポケットから落ちませんから、時間がムダになったことが分かりませんが、いま自分の手から百円札一枚がとんだら、つい夢中で車道の方にまで追っかけてゆくことでしょう。が、一日二時間も時間をムダにすごすとすれば、最低百円やそこの金をすてたと同じことになります。

一本だちの小売店の経営者か、歩合外交でないと、この感じはピンと来ないかもしれませんが、来なければ来ないでよろしい。この問題は、ここで打ち切ります。しかし、あなたが若し無為にすごす時間があれば、勉強する時間にふりかえて頂けませんか。これがやはり時間の活用であり、人生の能率化です。

物も云いよう

「お前の字は、まるでナメクジみたいだ」といって、職員組合からボイコットされた人がある。汗濶なことを云ったものだと思う。何とか外に云いようがなかったものか、たとえばい君の字は、ちと趣があり過ぎるとかなんとか。

よしんばナメクジだったにせよ、頭からこうどやしつけるように云われては、反撥せずにはおれまい。人それぞれに自尊心があるのだから……。

「おや、えらくほっそりしたね」

といって、わたしはかつて友人からポンと肩を叩かれたことがある。戦時中の食糧難からひどく瘠せ衰えて、骨と皮ばかりになっていた頃のことである。如才ない云い方もあるものだと思った。

この場合、「いや瘠せたね」と云われても、文句の云いようはなく、まさにその通りに相違なかったのであるが、「ほっそり

したね」と云われると、何だか自分、急にスマートになったみたいで、わるい気持はしないから妙である。

物は云いようだなと、心から敬服した。

森鷗外ではなかったかと思うが……、

ある夜、この文豪が、友人を自宅に招いて、鳥鷺の楽しみに耽ったことがある。碁打というものは、とかく時間の観念を超越したがるものである。この御兩人も、やはりその選に洩れなかったらしく、夜が深々と更けて行くにも抱わず、依然として、パチーリ、パチリと、いつ果つべくもなかった。

可愛そうなのは女中であつた。寝るに寝られず、いつまでも起きていて、御用のかかるのを待機していなければならなかったのである。

やがて、手が鳴った。急いで伺候すると、「いま、なんときだ」とあつた。主人の声である。女中は多少むくれていたらし

いので、

「モウ、十二時でございます」

と言上した。これを聞くと客は急にあわて出し、それではといいながら、そそくさと立ち上った。

客を送り出してからこの老大家は、女中を顧みながら、

「お客の前で、モウ十二時とは何ごとだ。なぜ、マダ十二時と云わぬのじゃ」と、いつになく厳肅な面持でたしなめたということだ。

いかさま、マダとモウでは、たった二字の違いでしかないが、相手に与える感覚がまるで違う。モウと云われると、何だか、いい加減にお帰りなさいと追い立てられるみたいで、気が気でないが、マダといわれると、たとえそれが、お世辞だと判っていても、わるい気持はしない。

まるい卵もきりよで四角というが、世の中の争議というものも、多くはお互の物のいいようから起るのではないだろうか。

(T)

昭和卅四年

逝く年の宗教界

逝く年をふりかえり、その日数のわずかなのに驚いて筆を持った。「日進月歩」と

表現された人間生活の進歩もロケット科学を先端とした宇宙時代にあつては一分一秒が人間に画期的な進歩を与えてしまう。今更に逝く年を省みる感覚に旧さがあるのかもしれない。

然し、われわれの身近な生活文化にも急速な新しい時代の到来をひしひしと感じせしめるが、これに比し人間の内面の改善にあつてはどれ程画期的な進展があつたであらうか。宗教界の課題は常にこの点にあるならば、矢張りわれわれは逝く年を省みて

その動きに鋭い関心を払うことを忘れてはならない。

さて、宗教界の動を思いつくままに列記してみるとまず仏教界では、

- 一、臨済宗妙心寺派六百年大遠忌
- 一、日蓮宗管長選挙のゴタゴタ
- 一、東西本願寺の御遠忌体制への強化。

一、曹洞宗の宗門白書発表

一、天台宗寛永寺の二人門主

一、全日本仏教徒大会

一、浄土両宗の合同

などが目につくが、次に神社界、キリスト教、新興宗教をみてみると、

一、伊勢神宮の制度問題

一、キリスト教宣教百年祭

一、創価学会の政界進出

一、金光教立教百年祭

これらが一応は注目されたものである。

仏教界にあつては妙心寺派の大遠忌を皮切りに浄土、東西本願寺が共に明後年に迫った御遠忌の募財に本腰を入れてきたことと対照的にキリスト教は宣教百年祭、金光教は立教百年祭と大祭典を挙げて布教の氣勢を挙げた。この中、すでに妙心寺派は臨済宗には珍しく大遠忌の収支決算に黒字をハジキ出しているが、浄土宗の予算十億、それに倍する東西本願寺、金光教の百年記念の本部前広場の大講堂の完成（費用は五億円と伝えられる）など、この一年間に宗教界を交錯した金額は大変なものと思像される。

だが宗教本来の使命的な分野ではどの程度に特筆されるもの。又進展したものがあつたであらうか。キリスト新聞の武藤主筆（教文館社長）は百年祭を迎えて、「日本

に於けるキリスト教徒は百年前の宣布当時と比べて人口比率からみると現在は決して増加していない。むしろ減少している。これは日本人は罪の意識が稀薄である」と述べてキリスト教界の現状と将来の布教方針に警句を告げている。そして武藤氏の表現を借りれば、罪の意識の稀薄な日本人は現世利益を迫って新興宗教へとツ走って創価学会の政界への驚異的な進出を遂げさせた。

「一票で一年無病息災」のウタイ文句が「政界浄化」のスローガンよりウケるところに大衆と云れる人々の宗教と政治に対する関心の程度が感じられよう。白亜の殿堂内の学会の諸先生は目下のところ議員生活の勉強に懸命の様子。然し政治も鎌倉幕府の様相とは異って立正安口論と王仏冥合論だけでは大刀打ち出来ない程、国際社会の政治は複雑であり専門的なものである事が諸先生にも判ってきてはいるらしい。然し「数が全てを制する」社会理念がある以上、まだまだ無言議員を選んで国立戒壇へ

の夢をみ続けるだろう。そして「今や相手にするに足らず」と豪語し乍らも既成仏教々団に対して墓地斗争を中心に寺への挑戦を続けてきている。

然らば仏教界はと眺めれば、お家芸の宗団内部の紛糾が目についてしかたがない。まず日蓮宗の管長選挙の無効訴訟、そして二人宗務総長の任命事件、身建山内の経済の乱脈等々その中を十人に及ぶ宗門ブローカーが名利の輩を餌に遊泳する混乱振り、いまや増田派も山田派も藤井派も何もない。みんな同じ穴のムジナさ、いま顔を出している全部が引こむべきだ」とある或る教界新聞の記者は嘆いていた。

これと同様の醜態が天台宗の上野の山で起きた。即ち寛永寺の二人門跡問題で、これも日蓮宗に負けずに裏で西武と東急が互いに糸を引いていると伝えられる程、怪々なる件。現在は発生当時の執事長今井祐申氏は退き、水上義海氏が執事長となっていてるが同氏は神田派、勿論、神田氏の再選を以って解決（来年二月選挙）とするであろう。

うが、今井氏も壬生照順氏等と画して青葉会なる宗政団体を作って巻き返しを狙っている。ただ当選した浦井氏のみが動かず、「誰かが何んとか……」と他力の要求を続けている。

次に東西本願寺と共に日本仏教界のリーダーを自負する曹洞宗が西沢浩仙氏に変わり佐々木泰翁氏がカムバックして第四次佐々木内局を組局した。同氏は就任早々に宗門の病状診断書とも云うべき宗門白書の作成に着手して二カ月余で完成して全宗侶に発表した。これは部外秘であったが中外日報に全文が連載されて教界に大きな刺激を与えた。白書発表後の佐々木内局は革新政策審議会を設けて宗政、教学に新政策を画してきたが十月に入り野党総和会から宗門一本態勢を提唱して従来の佐々木道交会内局を連立内局化へと進め始め又々、明春の宗会前を騒動、宗化する動きが見られてきた。ともあれ、この宗門は分裂は考えられず、注射の一本々々に病状回復、即ち宗門再興を果しつつある事は事実であろう。

分裂により弱少化された宗団の最たるものが浄土宗である事は衆目の一致するところであるが、小林浄宗、千々和本派の年余の苦斗が最近、ようやく合同劇の終幕を告げてきたが、十月下旬に増上寺を始め浄土宗六大本山の合同方式その他に関する申入れ書が発表されるや、東北連合会の名でこれに反対の声明が出るやら又々、舞台は幕とならずに廻り始めた感もするが、両当局は十二月初旬の臨宗で合同決定を内外に宣言する運びを取ることが予想される。唯だ、十年余に亘り合同々々で何んら宗門本来の仕事に成果を与えなかった当局者は深く反省とザンゲをここですべきであろう。

さて宗教界の逝く年のおわりは神社界ばかりでなく国民全体に問題を投じた伊勢神宮の特別立法である。この問題は非常に重要なもので残り少ない紙数では語ることは避けるべきで、既に今秋の全日仏徒大会でも嵐の論争を呼んでいるが、極く最近の消息によれば文部省は近い中に国民に対して宗教調査をする準備を進めているとのことである。単に皇室に連なる三種の神器のみ問題ではなく、結論的に云えば従来、中心的に動いてきた神宮奉讃会（会長佐藤尚武）を超え、宗教界をも離れて他の大きな力によってこの問題は押し進められつつある事に注視すべきであろう。この他に神社本庁は全国都道府県の神社庁を動員して全国氏子総代会を五月に結成させたり、神社本庁を中心に会員五十万を以って東京に社会館の建設を画しており、国民思想の根幹に再び神道を台頭させんとしておる様である。

以上、走り書き的な回顧を記したが明年こそは宇宙研究と真の科学時代に突入する年となれば、宗教界は一教団の紛糾にピリオッドを打って、ますます大きな視野で科学と宗教、科学と人間の関係に指導原理を打ち出して恒久平和の世界観を実践に踏み出すべきであろう。

（憲）

喜びと感謝の心

誰でも何か嬉しいことがあること、邪心はなくなってしまう。喜んでゐる時には、決して悪い考えは起らないものです。そして、心は非常に清純となり、もっと努力しよう。もっとがんばろうという強い力が生まれてくるようになると思います。このようにちよっとした喜びからでも、非常な勇気が出てくるのでありますから、まして、限らない天地の恵みを認識し、これに深い感激の心を持ったならば、実に無限の力が湧いてくるようになるはずであります。この喜びと感謝の心から、ものを生み出す知恵才覚が次々と湧いてきて、日々の生活の上に、力強い労作が加えられて行くようになると思います。

「浄土」三十四年度

目次一覧表

正月号

表紙・扉絵 結城天童
さし絵・カット 加藤金一

新春随想いのしし君多謝々々

.....武田 秀郷(12)

随想「窓」.....岸 信宏(2)

高僧と長寿.....清水谷 恭順(4)

心も新に.....那須 政隆(8)

仏間にて.....伊東余志子(18)

正月と仏教.....松崎 可定(15)

中国綺談碧玉の首環.....牧尾 良海(26)

正月料理の話題.....編集部(36)

光明浴.....山本 恭雄(42)

山下現有伝.....大橋 俊雄(34)

信ずるところ.....竹中 信常(22)

——信仰のあり方・その一——

南無阿弥陀仏.....(20) 仏教ものしり帳.....(17)

扉の御法語.....(33) 会員だより.....(45)

童心仏心.....(30) 後記.....(45)

真理の花たば.....佐藤 良智(35)

——若き女性への仏教入門(一)——

二月号

表紙・扉絵 結城天童
さし絵・カット 加藤金一

ね は ん.....(2)

法然上人私見.....福井 康順(4)

獄中で両親を探し求める

.....林 靈 法(12)

はだしの国インド.....斎藤 昭俊(9)

実話暴力の船.....吉野 翠幹(17)

童話お日さまの子.....きりふちてる(34)

ここころの茶椀.....竹中 信常(22)

——信仰のあり方その二——

浄土歌壇.....岩野喜久代(27)

勸募日記.....A M(39)

元祖法然上人.....(28) 二月の経文.....(33)

扉の御法語.....(20) 新規会員紹介.....(38)

童心仏心.....(16) 支部通信.....(41)

真理の花たば.....佐藤 良智(30)

——若き女性への仏教入門(二)——

三 月 号

表紙・扉絵 結城天童

さし絵・カット 加藤金一

意識 光明歎徳章……………(1)

“彼岸”に思う……………大野 法道(4)

彼岸随想 河をわたる……………大崎 崇岳(8)

コナラクへの道……………斎藤 昭俊(12)

經典解説 阿弥陀経……………戸松 啓真(20)

富田 鳳 瑞 伝……………田中 菰石(14)

信 仰 の 味……………竹中 信常(16)

——信仰のあり方・その三——

聖教をひもどく……………足柄 常念(17)

浄 土 歌 壇……………岩野 喜久代(23)

勸 募 日 記……………A M(39)

創作上人と兼実夫妻……………鶴田 湛泉(30)

不可思議功德……………(28) 朝のことば……………(138)
観音様に御利益を……………(10) 支部通信……………(41)
さすかったお話を……………(7) 寄付御芳名簿……………(27)
童心仏心……………(27)

真理の花たば……………佐藤 良智(24)

——若き女性への仏教入門(三)——

四 月 号

表紙・扉絵 結城天童

さし絵・カット 加藤金一

釈尊の隆誕と現代……………佐藤 賢順(2)

宇宙時代と仏教……………後藤 真雄(8)

お 酒 と 水……………崇 岳 房(6)

經典解説観無量寿経……………阿川 文正(14)

仏陀の地①……………斎藤 昭俊(11)

武田芳淳伝……………大橋 俊雄(28)

権現様の御遺訓……………鈴木 成元(18)

——岡崎大樹寺を訪ねて——

童話 さくら寺ののんき地藏……………伊東 挙位(32)

浄 土 歌 壇……………岩野 喜久代(39)

実話 長寿の調べ……………山城 正隆(22)

随想 手を撃ぐ子等……………安藤 正雄(30)

勸 募 日 記……………A M生(40)

扉の御法語……………(38) 日本霊異記より……………(25)
童心仏心……………(13) 俺はどこへいった……………(34)
一心専称彼仏……………(26) 仏教ものしり帳……………(30)

人生の夜明……………須藤 隆仙(36)

——法然上人御一代記(一)——

五 月 号

表紙・扉絵 結城天童

さし絵・カット 加藤金一

經典 婦人とめざめ……………(2)

転 生 ——祐天記——……………成田 良穂(6)

逆馬……………村上 博了(5)

仏陀の地②……………斎藤 昭俊(9)

実話時子の行き先……………編 集 部(26)

經典解説無量寿経……………鈴木 成元(14)

大鹿愍成伝……………大橋 俊雄(12)

中国綺談魂を拘られた男……………牧尾 良海(20)

大地はなびく……………須藤 隆仙(23)

法然上人御一代記(二)

創作仏壇物語……………石川 忠正(30)

勸募日記……………A M(40)

扉の御法語……………(16) 仏教ものしり帳……………(11)
童心仏心……………(25) 伽葉目蓮阿難……………(18)
日本霊異記より……………(29) 時は命なり……………(22)

真理の花たば……………佐藤 良智(36)

若き女性への仏教入門(四)

表紙・扉絵 結城天童
さし絵・カット 加藤金一

特集 — 浄土宗教学院創立

十五周年記念 —

挨拶……………佐藤 密雄(2)
体 験……………森 赫子(4)
諸行無常のはなし……………武田 泰淳(12)
ひじりの法然……………佐藤 賢順(22)

中国綺談 応現神……………牧尾 良海(2)
經典解詁 法華経……………石上 善応(32)
浄土歌壇……………岩野 喜久代(39)
角谷隆音伝……………大橋 俊雄(30)
扉の御法語……………(1) 小さい御出家……………(35)
童心仏心……………(38) 扉の御法語解説……………(40)
絶体の世界……………須藤 隆仙(36)

——法然上人御一代記(三)——

表紙・扉絵 結城天童
さし絵・カット 加藤金一

み魂を迎えて……………香月 乗光(2)
お盆の祭り……………中村 康隆(6)
盆風物詩……………編 集 部(14)

赤赫子さんのことなど……………村田 嘉久子(10)
教阿陀仏入寂の地……………北村 謙順(23)
仏陀の地③……………斎藤 昭俊(32)
石井大宣伝……………大橋 俊雄(22)
童 話 かぼちゃの花……………森 義 正(28)
随 想 仔犬昇天……………安藤 正男(31)
入信の機……………村上 博了(35)
意 訳「四誓偈」……………吉田 定久(13)
浄土歌壇……………岩野 喜久代(40)
本来なる自分……………須藤 隆仙(17)

法然上人御一代記(四)

扉の御法語……………(26) 西方極楽世界……………(20)
童心仏心……………(16) 日本靈異記より……………(34)
真理の花たば……………佐藤 良智(36)

若き女性への仏教入門(五)

表紙・扉絵 結城天童
さし絵・カット 加藤金一

經典 阿難尊者……………(2)

マンモス宗教まか……………浄土宗教学院
りとおる……………新興宗教研究院(11)

作州三霊場参拝……………中川 大仙(18)
道重信教伝……………大橋 俊雄(16)
經典解説 維摩経……………佐藤 成順(26)
徳川家墓所発掘に当って……………村上 博了(29)

妙好人伝 抹茶々碗とお念仏……………福富 海岳(22)
小倉の上人……………村上 博了(5)
浄土歌壇……………岩野 喜久代(38)
釈尊の生涯(1)……………佐藤 密雄(6)

扉の御法語……………(20) 善人になる……………(33)
日本靈異記より……………(15) 新刊紹介……………(37)
童心仏心……………(25) 勸募日記……………(39)
真理の花たば……………佐藤 良智(43)

——若き女性への仏教入門(六)——

表紙・扉絵 結城天童
さし絵・カット 加藤金一

彼岸会に憶う……………藤吉 慈海(2)

吉川大順伝……………田中捨次郎(12)

仏陀の地④……………斎藤 昭俊(10)

經典解説 華嚴經……………石川 孝之(14)

比叡日記……………佐藤 賢順(6)

守られているもの……………高橋 良和(22)

仕事するにも南無阿弥陀仏……………村上 博了(24)

法然上人の感化……………(5)

中村弁康追悼特集

中村氏のこと……………真野 正順(28)

中村さんの思い出……………里見 達雄(31)

信行道場と弁康上人……………伊藤 宏天(33)

釈尊の生涯(2)……………佐藤 密雄(35)

扉の御法語……………(12) 仏教ものしり帖……………(39)

童心仏心……………(17) 会員だより……………(40)

真理の花たば……………佐藤 良智(18)

——若き女性への仏教入門(七)——

表紙・扉絵 結城天童
さし絵・カット 加藤金一

天台大師と法然上人……………林 隆 碩(6)

よろこびの中のよろこび……………戸松 学瑛(2)

仏教にかみつ……………山田 登(23)

善人なお生る……………仁戸田六三郎(18)

実話 夢の中のお念仏……………樋口 亮栄(11)

神谷大周伝……………大橋 俊雄(14)

創作 三浦一族の最後……………鶴田 湛泉(26)

法然上人の感化……………(5)

浄土歌壇……………岩野喜久代(22)

釈尊の生涯(3)……………佐藤 密雄(16)

扉の御法語……………(12) 仏教ものしり帖……………(39)

童心仏心……………(25) 会員だより……………(40)

真理の花たば……………佐藤 良智(36)

——若き女性への仏教入門(八)——

表紙・扉絵 結城天童
さし絵・カット 加藤金一

念仏生活の一面……………藤井 実応(2)

信仰へのみちびき……………(13)

俳人一茶の逸事……………藤木 随教(7)

經典解説 觀經音……………佐藤 行信(14)

林弁我伝……………大橋 俊雄(10)

仏陀の地⑤……………斎藤 昭俊(18)

間抜けひょうろん……………本 田 仁(30)

童話 きつねの顔……………きりふちあきら(20)

法然上人の感化……………村上 博了(35)

浄土歌壇……………岩野喜久代(39)

釈尊の生涯(四)……………佐藤 密雄(24)

扉の御法語……………(8) 琴の糸の如く……………(12)

童心仏心……………(17) 会員だより……………(40)

真理の花たば……………佐藤 良智(36)

——若き女性への仏教入門(九)——

浄土歌壇

岩野喜久代選



天

松江 渡辺 絲子

路遂に海に出でたり働くも花咲く
ごとき明るさを増す

評 三句、働くもは道路工事を
していることを指します。

路普請が進んでとうとう海
の見える場所まで開通した
喜びを歌っているのです。

地

小田原 中里 史子

秋雨や奈良の廃寺の草わけて蜘蛛
の巣払ひみ仏拝む

評 古都奈良、廃寺、秋雨、

草、蜘蛛の巣、と並べて、
荒涼としたものの寂さの中に

埋れるみ仏のいよいよ寂然
としたみ姿を浮彫にしてい
ます。

人

神奈川 鈴木 松代

何族の裔ならなくにわが孫は巧に
捕へ蠅も食ふなり

評 まことにたくましく、原人
の強さと敏捷を持つ幼児の

姿です。それを見る祖母の
誇らかな驚き。

逗子市 松原 昌治

百尺の古木に遇へば百尺を舞ひ上
りけりみ寺の蝶は

東京 平川 ウメ

わがちさき靴の先にて踏まれたる
栗の毬より生れし三つ子

吉野 大口 善信

台風の中に突き入り消息を絶ちし
子を思ふ不安の一夜

大阪府 中谷 善次

牡丹苗三株ばかりを植ゑたれば土
膨れたり十月の日に

仙 台 千葉ちとせ

わが庭の風呂に月来る頃をしも入
れて楽しむ海の心地に

高 岡 関 理一

台風は大松折れて人死にき裂かれ
し幹の白き夕ぐれ

鹿児島 長崎 恒子

経の文字宙に浮びて一切諸仏所護
念経と夢にして誦す

名古屋 堀江真鯉夫

鬼と云ふ愛嬌者が夢に来て罪をと
がめず吾れと戯る

東京 うえのつねや

霊園か真白き石の鳥居見ゆ女松の
みどり高く立ちつつ

神奈川 熊 坂 満

青竹を十字にたてて木の蔭に一周
忌する海近き家

高 岡 竹上 盛衛

その昔寺の権威を示したる口上書
は虫喰ひてあり

大阪 清水 虹二

嵐去り晴れわたるけさ鶏を庭に放
ちて糞搔く我れは

北海道 石谷てい子

久々に坐りて食事とる君の後に青
し北国の空

青 森 井上 きつ

何の縁ありてか二人は結ばれぬ感
情もなく恋もなくして

鹿児島 串岡 君江

台風の荒ぶ狭庭に三尺の紅のヤマ
ツカ炎と狂ふ

兵庫 岸辺かずえ

入念に朝の鏡に整へし我が髪の毛
をいとほしむかな

和歌山 中川 誠一

水害に秋の祭も取止めし紀の川べ
りの広き町町

香 川 多 田 勲

天災と言ふには多き償ひぞ瞬時に
国土泥海となり

宮 城 鳥山 良子

星降ると大声あげてかけこみし幼
き日あり星を仰ぎて

東京 葛岡 利子

野葡萄の濃き紫のたるる山行けば
か細き蝸の鳴く

富 山 八島 美雄

月見にと供へし団子小芋たち綺麗
に並び澄し顔なり

東京 菊地 美夫

山々は秋に入るなり栗の実の未だ
熟まねど口開け初めき

錦地は菊花薰る今日此頃と存じます。御尊師御一同の御麗健の程を念じ上げると共に御芳志の御清香合掌して感謝致しました。過日は御多忙の処をも顧みず聖書のお伺い致しました処辱けなくも慈愛こもる御便りそれに又浄土誌重ね重ねの御配慮勿体なさに伏して謝し上ぐるのみ、早速振替にて誌代差上ぐべき処ですが何にしろ市と申しても町村合併による市街地より約三里、玉野局より約一里という山村の僻地です故御容赦の程お願い致します。

浄土聖典は早速堅紙表をつけて大切に保存愛誦致します。又御仰せ下さった無量寿経も拝読致し度う御座います。小生貴会にお便りする前に浄土宗務所教学部宛に私共の聖典三部経の講義して下さった本はありませんかと伺い申上げましたところ、そんな本は見当りませんとの御返事に落胆致し居りました処御尊師のお便りに光明を得た感じで嬉しくてなりません何にしろ私は明治三十五年生れで尋常卒、当時の小学高等科二年修了（玉野局のあるところに尋常科高等科小学校もありました）私の下柳は上柳学校があつて銀山。上ノ畑。と小部落四ヶ村。同級生は男女合せ十名といった時代でした。私の浄土寺。延沢。金城寺まではこれも一里あるといった山村。去る十日

先ずは御芳情辱けなさに合掌

十月十三日

山形

笹原伊三郎拜。

新規会員登録

神奈川	靜岡	〃	〃	〃	東京
椎野善太郎	正定寺	高橋清子	宮田八重	山田素十夫	高橋正純様
〃	〃	〃	〃	〃	〃

一部 定価 金五十円

(送料四円)

會費一力年

金六〇〇円
(送料不要)

淨土

十二月号

昭和十年五月廿日

第三種郵便物認可

昭和三十四年十一月廿五日

昭和三十四年十二月一日 発行

定価 五十円

編集人 竹中 信常

發行人 佐藤 密 雄

印刷人 神谷秀雄

印刷所 神谷印刷株式会社

東京都品川区上大崎一ノ七八二

發行所 法然上人續仰會

振替東京八二一八七番

The testimonial
from the governor of
Kyoto
awarded to
U. NAKAMURA.
the director



The letter of
gratitude from
the Mayor of
kyoto sent to
NAKAMURA FUNGUS
CHEM. LAB.

中村医学

全治に実力作用する特
許フザリウム解毒
から病原の淘汰作用！
発生シワルツマン因子
の滲透から再生作用！

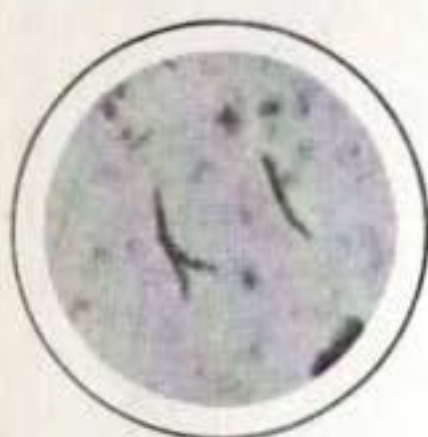
医学ニュース
中村医学の学理を
世界に発表さる

大阪医大の名誉
教授谷村博士は
兼て中村菌液の
実験を実施され
その卓効力を刷
新論文に英訳さ
れて全世界の医
学界に報告の光
栄に浴しました

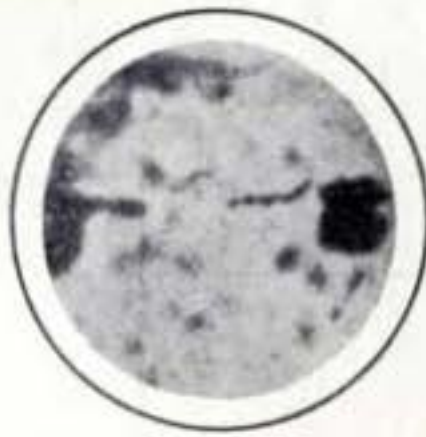
中村医学必携
実験写真入ア
ート縮本贈呈
◎御申込下さい！

中村医学にて難病の治る真理

中村医学の基礎



恐るべき耐性菌を崩壊淘汰する



滲透するバクテリア層を完全淘汰する



実 験 実 話 報 告 例

- (一) 高血圧で脳溢血の危険状態を好転恢復されている報告。
- (二) 心臓病特に危険な狭心症の危篤を好転恢復している報告。
- (三) 癌腫の進行を阻止し癌細胞を溶解淘汰して食道癌、胃癌、舌癌を恢復している報告。
- (四) 肺結核の治療中に耐性悪化した薬毒の副作用を好転して恢復されている報告。
- (五) 肝臓を腫らし胆嚢を痛めた危篤の入院患者が好転恢復した報告
- (六) 胃潰瘍で食事も出来ず手術を要する危篤患者が好転恢復した報告。
- (七) 腎臓、糖尿病で入院すれど全治せぬ状態から好転全快の報告。
- (八) 関節リュウマチ並に神経痛で入院しても全治不能の難症が好転して楽に歩行できる報告。
- (九) 喘息で注射するほど発作してくる病原と副作用の被害を解毒好転して100%全治した報告。

中村菌化学研究所

京都市東山区翰町五条南
電話 祇園(6)2364・0522番

Nakamura Fungus Chemical Lab.
Sayamachi Gojo, Higashiyama-ku,
Kyoto, Japan

御たを御
をつを御
告なを御
広に誌を
本覧雑記
入下

東京外国語大学教授 増谷文雄 著

親鸞

——その生涯と思想——

B6版 三二四頁
定価 二八〇円
日本書房刊

浄土真宗の立場を離れて新しい見地からの親鸞観、蓮如を通して語られた親鸞でなく、教団の枠をはるかに越えて、親鸞の腹藏のない言表にふれながら、その人となりと思いをえがいている。

著者はいう、親鸞の本質は、浄土真宗の樹立者とか、悪人正機思想の提唱者とか、そのような役割を異にして、もつと、宗教にとつて根本的な問題について、すぐれた種をまき、すぐれた範例をのこしたところにある。

目次

第一部 その生涯

吉水における親鸞

選択本願念仏集と親鸞

念仏弾圧のあらし吹きまく

る

親鸞の教化のしかたの一例

等

第二部 その思想

一つの新しい立場から見る

等

法然の本質は「智慧」にあった

った

選択ということと最勝という

こと

悪人正機のこと、

法然の場合、親鸞の場合念

仏と信心とは一枚であるこ

と

甦えるいのち

側々と人の心を打つ失明の体験
文学の世界からみた無常の話
宗教の信仰を遺文にみる

森 赫子
武田 泰淳
佐藤 賢順

A五版・二十七頁
定価三十円・千八円

二十部以上一五分引
五十部以上一割引
百部以上一割引

東京都品川区上大崎一の七八二

発行所

法然上人鑽仰会

振替 東京 八二一八七番

宗祖七百五十年御忌記念製作
カラー・スライド

「円光大師二十五霊場」上・下二巻

定価上・下二巻 金一五〇〇円
荷造送料 金 九〇円

御注文の節は前金にてお願い致します

東京都港区芝公園十九号地浄土宗務所内

浄土宗教化団中央本部

申込先

振替東京六一九三九番
電話 芝(43)一三八二